

さてその後、花穀のお達、尼妙達は百倉長者の情けにより、白川の大伽藍龍女山無二法寺の住持の尼妙真大禅尼の弟子になり、既に剃髪、得度したにもかかわらず、五戒を破り、酒に酔って寺内を騒がすこと大方ならねど、大禅尼の情けによってようやくにその罪を許されて、そのこと無為に治まりけり。

しばらくは身を慎んで学寮にのみ籠もり居て漫ろ歩きをせざりしに、ほとぼり冷めて熱さを忘れる、ことわざに漏れる事無く、ある日鬱気を晴らさんと蓄えの金を懐に独り山門を立ち出て、麓の方に赴く程にたちまちカラカラ、カンカンと鑿を打つ音が聞こえしかば、その所へ行って見るに、すなわち麓の町にして、ここに一軒の鍛冶屋あり。

妙達はつくづくとその店先に佇んで、その体たらくを窺うに、新たに打ちたる刃物、打ち物、金棒、利鎌※、鋤鋤など数多あり。上手な鍛冶と見えしかば、そのまま内に進み入り、主人の男にうち向かい、

「我はちと詭えたき物があるなり。最上の鉄にて磨き杖を打ちてたべ。重さはおよそ百斤ばかりでよろしからん」と云いければ、主人は聞いて呆れ果て、

「それがしはこれまで幾度となく金棒をも打ちだし、禅杖、錫杖なども作りしかども、左様に重きを打ちたる事無し。昔、木曾殿の巴御前※はその力百人力に当たりし事を語り伝え、又、近頃の板額御前※も万婦不当※の聞こえあれども、重さ百斤に及ぶ打ち物を使うたる事は聞かず。唐土の関羽すら八十二斤の青龍刀を使いしとやら云うにあらずや。されば山奴一斤の二百目の割りを以てする時は百斤は二十貫目なり。尼君、力に覚え有りとも、左様な杖は突き難からん。目方を減らしたまえかし」と云うを妙達は聞きながら、

「我、何ぞ、近頃の巴、板額に及ばざらんや。しからは関羽とやらに倣って八十二斤に致すべし」と云うを主人は押し返し、

「八十二斤もなお多し。もしそれがしに任せたまえば、五十斤の重さに打たん。それにてても十貫目なり。打ち出来し時、持たれぬとて必ず恨みたまうな」と云うに妙達は微笑んで、

「しからは我その間を取り、六十斤にあつらえん。念を入れよ」と語を押しして、▼値を定め金を渡し、又、この他に一尺二寸の戒刀一腰をあつらえて、

「いずれもよろしく出来れば、別に褒美を取らすべし。ずいぶん急いで良くせよ」と言葉せわしく約束しつつ、鍛冶屋の店を走り出て十間余り行く程に、右の方に一軒の煮売り酒屋あり。

※利鎌（とがま）：鋭利な鎌。よく切れる鎌。 ※巴御前：木曾義仲の側室。知勇に優れ、義仲に従い戦功を立てた。

※板額御前：越後の豪族の城氏の一族で鎌倉時代に活躍したと伝えられる女性武将。 ※万夫不当：強く勇ましいこと

のきば ひどまる さかばやし かか かど はなだ このぼり
軒端には一丸めの杉の酒林を掲げ出し、門には縹※染めの小幟を高くひらめかし、名物踊り子汁と記せしは泥鰯汁の事なるべし。

※縹（はなだ）：明度の高い薄青色のこと

妙達はこれを見て、たちまち口によだれを流して心の内に思う様、

「……この頃は絶えて久しく生臭き物を食わず。酒はもちろん香りだも嗅ぐ事無し。たまたま、かかる所へ来て宝の山に入りながら手を空しくして帰られんや。まず一杯飲んでこそ、寺へ帰らめ」と思案をしつつ、そのままひらりと酒屋に入って床几に尻をうち掛けて「さあさ酒をいだせかし」と云うを主人は見返って、

「御身は無二法寺の尼御前なるべし。定めて御身も知りたまわん。彼の御寺は掟厳しく、それがしにも御下知あり。全て御寺の比丘尼たちに酒を売る事を許されず。さあさ出て行きたまえ」と云うに妙達は声を潜めて、

「さりとは野暮を云うものかな。我が今ちどの酒を飲むとも人に告げずば誰か知るべき。いささかも苦しからず、さあもて来よ」と急がせども主人は聞かず頭をうち振って、

「それがしらは御寺より元手を借りて世渡る者なり。ちどの酒を売らんとて後ろ暗き業をせば、後日の咎めを逃れ難し。さあさ帰りたまえし」と云うに妙達は詮方なく呟きながらそこを出て、またまた他の酒屋に赴き、酒を飲まんとしつれども、いつかたの酒屋にても断り云う事初めに変わらず。いずれも決して売らざれば、妙達は悶え苦しんで、いかにせましとなお行く程に、町外れの空地の辺に近頃いだせし店とおぼしく、仮初めの小屋掛けして半ば引き立てたる障子には山鯨(猪)、紅葉(鹿)の吸い物と印したり。妙達はこれを見て、心に一つの謀り事を思い付きつつ、会釈も無く、又、その店に入りにつけり。

かくて花殻の妙達は獣店に立ち寄って、床几に尻をうち掛ければ、主人はうち見て、顔うち守り、

「御身はもしや無二法寺の尼には御座さずや。御覧の如く我らが店は獣の煮売りをするのみ。

精進物は候わず」と云うを妙達聞きながら、

「否、私は遠方より遙々と来る者。抖藪※行脚の比丘尼にて無二法寺には縁も無し。いとおこがましく思われんが、頭こそかく丸めもしたれ、五戒を保つ事は要せぬ。なお半俗の身であれば肉食はもちろなり。猪はもとより好物なるに多少を問わず酒諸共にさあさ出したまえかし」と真しやかに云いくるめれば、主人は心に呆れながら、物の云い様、板東声にて実におくつけき尼なれば、偽りなりとは思ひも掛けず、猪の脂身一ト鍋を空炒りにしていだしつつ、一トちろり※の酒諸共に床几の辺に置き並べるを妙達うち見て密かに喜び、そのまま手酌に引きかけ引きかけ、幾度となく銚子を替え、鍋をも四五度替えにければ、酒は一斗五升に及び、肉は八百五六十目を少しも残さず食らい尽くして腹十分になりしかど、なお鍋焼きの忘れ難さに猪の肉二百目余りを竹の皮に包まして土産にせんとして袂へ押し入れ、▼主人に値を償って、そのままそこを立ち出て、寺を指してぞ帰り行く。

※抖藪(とそう)：衣食住に対する欲望をはらいのけ、身心を清浄にすること。

※ちろり：酒の爛(かん)をする道具。

罪も報いも白川の岨道伝い、ひよろひよろと踏みも定めぬ足引きのこの山風に吹かれつつ、酒の気既に湧き上り、早や十二分に酔うたれども諺に云う本性違わず、心の内に思う様、

「……今日はたまたま酒を過して、いささか色にいでたらんに、表門より入らんとすれば、彼

の番人らが悪堅くて思わぬ口説やいで来ぬらん。裏門より入るこそ良けれ」と思案をしつつ、回り道して裏手の方より、よろめきながら来にけり。

しかれども無二法寺は世に聞こえたる大寺なれば、裏門にもまた門番あり。その夫婦の者は番を務めて花を売り、門を守り、又、掃除の者五六人が同宿してここに居り。既にして門番らは妙達が又、ひどく酔って帰り来にけるを遙かに見つつ慌てふためき、門戸を閉じて一人の掃除の者を早くも役所へ走らせて、監主の尻に告げにけり。

さる程に妙達は早や裏門に近づいて心もとなく辺りを見るに、門の辺に建てられた供養塔の筋向いに石の地蔵と如意輪の観音を安置した雨よけの厨子堂あり。妙達はこれを見返って、からからと笑いつつ、

「此の似非地蔵は誰を待つやら。ちと気保養(気晴らし)に歩きもせず、立ち竦みになる愚かさに、六道能化※の名にも似ず、借りる時の地蔵顔、目を細くして笑いかけても一文も貸す銭は無し。又、如意輪も馬鹿馬鹿しや。何の苦勞がある事やら、朝から晩まで頬杖付いて、豊後節※でも語る気か、これ何ぞいの」と立ち寄って格子をはたと打ち叩く、拳の冴えも覚えの大力、その格子はたちまちに砕けたり。妙達はこれを見て又、からからと笑いつつ、

「我が身が出家になりしより、絶えて久しく棒も使わず、力試しをする事無ければ、せめてここに御身らに手並みを見せて目を覚まさせん。そんな怠けた事では無し、一番見るか」と誇り顔に折りし格子の格を抜き、「やつ、とうとう」と掛け声高く、力に任して打つ程に▼格子は砕け羽目板離れて簀立の如くになりたりける。柱に右手を押し掛けて押せばゆらゆら揺らめきあえず、楔は緩み抜き折れて将棋倒しにばたばたと、倒れる柱諸共に石の地蔵も転びけり。

※六道能化(ろくどうのうげ)：六道の辻で死者を導き、衆生を教化する地蔵菩薩の別名。

※豊後節：心中物を得意として大流行した浄瑠璃の流派の一つ。

裏門に居る男どもは門番所の窓の戸の隙より、この有様を見て大きに驚き、再び人を走らせて、此の事を注進してければ、監主の尻たち驚き呆れて事大変になりたり。裏門に人を増やして「例え妙達荒れるとも内へな入れそ」と下知すれば、門番人らは心得て厳しく門をぞ守りける。

さる程に妙達は地蔵堂を打ち破り、なおあちこちへよろめきよろめき、早や裏門より入らんとするに、開き戸、潜りも引き立てたるを見るよりたちまちおとして「開けよ、開けよ」と呼び掛けつつ拳を握り、門の戸が割れるばかりに打ち叩けば、門番人らはこらえかね、内よりも又、声を荒げて、

「此の似非比丘尼が又しても食らい酔って帰りしよな。五戒を破り酒を飲み、あまつさえ門外の地蔵堂をうち破りし、破戒無慙の仏敵を裏門なりとていかでか入れるべき。その事、既に隠れ無ければ、監主方の指図あり。弥勒の世までも叶わぬ事だ。さあさあ足の向く方へ立ち去らずや」と罵れば妙達ますます苛立って、

「ほざいたり瘦せ犬めらが。早く開いて通さずば、我今、門に火を掛けて、皆焼き払って内に入らん。かくても止めるか、通さぬか」と呼ばはりながら拍子を早めてしきりに門を叩きけり。

※破戒無慙(はかいむざん)：戒律を破りながら良心に恥じないこと。

門番らは妙達が焼き払わんと云いしに驚き、又一兩人が走り行って監主の尼に告げにければ、諸役の尼たち驚き騒いで、

「しからば事の大事にならん。まず穩便に内へ入れよ。その後、思案もあるべきに」と云うに門番忙わしく、元の所へ走り返って、妙達に声を掛け、

「あまりに和主が騒がしければ、只今開けて通すなり。さあさあ入れ」と呼ばはりながら引き抜く門諸共に身をひらかして隠れけり。

妙達は始めより待ちわびし事なれば、今開くと云う門の戸に両手を掛けて押す程に、扉は左右へさっと分かれてその身は内へよろよろと、のめり入りつつ四つ這いにたちまちハタと転びしが、ようやくにして身を起こし、塵も払わずひよろひよろと、しどろもどろに己が住む学寮に帰り来にければ、同宿の尼たちは驚き呆れて物言わず、皆々片隅へ寄る程に妙達は喉のあたり、げろげろと鳴る程しもあらず、吐く反吐は前にうず高く、臭さに皆々たまり得ず、鼻を覆って呆れて居り。

妙達は今、小間物店を打ちいだせし時、袂より滑り落ちたる一包みの猪の肉を見て「良き物あり」と手に取り上げて、

「折角食うたる鍋焼きを戻してしもうてひもじくなりぬ。酢の無い刺身も珍しからん、ドリヤ賞玩(賞味)※」と、竹の皮開く牡丹は猪の肉、五膳箸にてむしゃむしゃと、食らうを皆々見るに得たえず、その座を避けんとしてたりしを妙達早く腕を伸ばして一人の比丘尼を引き捕え、

「これ程旨い物なるに一口なりとも付き合いたまえ。これ食いたうは無いかいの」と擦り付けたる口の端、比丘尼は「あわや」と口を閉じ、引き離さんと焦れども妙達ちっとも離さなばこそ、酔うたる者の癖なれば、皆諸共に立ち寄って詫びるを聞かぬ非道の手込めに詮方も無く見えたる折から監主の尼の指図に従い、八九人の男共、妙達の狼藉を取り鎮めんと用意をしつつ、手に手に棒を引き下げて込み入らんとする程に、妙達早く見返って捕らえし比丘尼を突き放し、迎え討たんとしつれども打ち物を持たざれば、机の脚を引き抜き持って呻いて廊下に走り出て、先に進むをうち伏せうち伏せ、面も振らず▼競いかかれば、多勢を頼みし男どもも立つ足もなく辟易して頭を破られ手足を損ね、むらむらはつと逃げ散るをなお逃がさじと追っ駆けたり。

※賞玩(しょうがん): ①そのもののよさを楽しむ。②賞味する。③尊重する。

かかる所に住持の尼の妙真禪尼が端近くたち出て、

「妙達又もや何をか狂う、無礼なせそ」と止めたまえば、妙達は振り上げたる机の脚を投げ捨てて忙わしく跪き、

「上人御前、察したまえ。私は人を打たざりしに、監主の尼たちが遺恨やありけん。男どもを駆催して絡め捕らんとするにより、止む事を得ず追いでたり。理非を正させたまえかし」と託言(恨み)がましく※訴え申せば、大禪尼は頷きながら、

「とにもかくにも私に愛でて今宵は早く休めかし。明日は正して得させんず」と寄らず触らず宥めたまえば、妙達も酒の酔い半ば醒めたる頃なれば、上人の扱いを良き潮にして再び騒がず。その時、禪尼は兩人の侍者の尼に囁きたまえば、尼達はなお恐る恐るも妙達の手を引き助けて、そのまま部屋へ伴いつつ、様々諫めこしらえて彼女の臥所に入れしかば、さすがに狂い疲れやしけん、前後も知らず伏したりける。

されば又、首座、監主、諸役の尼達十人余りがその夜、禪尼の御前に参って、

「先にも申せし我々の諫めを聞かせたまわずして、世に類無き悪たれ者の妙達を扶持したまう故に、一度ならず二度ならず寺を騒がせ人に傷付け、あまつさえこの靈山を猪豚の肉に汚せし、例し少なき曲事ならずや。世上の批判も後めたし、御思案あらま欲しけれ」と、苦々しげに訴えける。

禅尼は聞いて頷きたまい、

「始めよりして御身らを密かに諭したる如く、彼の妙達は出家に似気無く、いと猛々しき女にて破戒の咎のある者なれども宿世の業因滅する時に仏果を得ん事疑い無し。しかれども大方ならぬ過ちも数重なれば、あのままには差し置き難しとは云え、当山の檀越の百倉長者の頼みによって我が弟子にせし者なれば、まず彼の人に由を告げ、その後にもかくもせん。明日は早朝山科へ使いの尼を遣わすべし」と情けを込めて答えたまえば、皆々は又、今更に心もとなく思えども、返す言葉も無きままにその計らいをぞ待ちにける。

かくて妙真禅尼は次の日、朝勤めも果てて後、手づから書状をしたためて侍者の尼に持たせつつ、なお口上を云い含め、山科へとて遣わしたまえば、使いの尼は一兩人の供人を従えて百倉長者の宿所へ赴き、主人の長者に對面して口上を述べ書状を渡せば、百倉はひどく驚きながら禅尼の状を開き見るに、妙達がありし事どもそのあらましを書き連ねて「かかれば彼女を我が寺に留め置く事叶い難し、我らが良きに計らうか、それともそなたが引き取りたまうや、答えを聞かまほしけれ」といと懇ろに聞こえたまうに、長者はしきりに嘆息して、かつ大禅尼の情けを喜び、「妙達の事はともかくも御心任せに計らせたまえ。自業自得に候えば、恨み申さん事にはあらず。又、破損せし地藏堂はそれがしが修復し奉らん。なおこの上の大慈大悲を願い奉り候かし」と詳しく返事をしたためて使いの尼には一ト包みの布施物を贈りつつ、その取り成しを頼みける。

優之介親子もこれらの事を聞くからに心苦しく思えども、又、今更になだむべき、詮方とても無かりけり。さる程に使いの侍者は無二法寺へ立ち帰り、住持の妙真大禅尼に百倉長者の返簡を披露し、且つその口上を聞こえ上げしかば、禅尼は「さこそ」と頷いて、その明けの朝、妙達を辺近く招き寄せ、

「そなた事、しばしば寺の法度を犯し、酒を飲み肉を食べ、人と仏堂を打ち損なつて、この靈場を騒がせしは俗人だもせざるところ。これ尼法師の所業ならんや。我いか程に▼思うとも今更、寺には差し置き難し。鎌倉の松岳山龍女寺という尼寺の住持の真如大禅尼は我が法門の妹弟子なり。よって、そなたを彼の寺へ頼み遣わさんと思うなり。さあさあ用意せよかし」とて路用の銀子三百匁に着物一重ねと頭陀袋、脚絆、笠まで取り添え、「錢ぞ」とてたまわりければ、妙達は大方ならぬ禅尼の慈悲に謝り入て、かしこまり(謝辞)を申しつつ、退き去らんとせし時に、禅尼は「しばし」と呼び止め、

「そなた、今こそかくもあれ、遂には仏果を得つべきに、終わりを思って修行せよ。その行く末を示さんとて「思い見よ、緑の林、山水の、富も仇なり、江にぞ止まる」と三遍吟じ返しつつ、心に留めてこの歌を忘れなせよ」と示したまえば、妙達はこれをよく覚えて、禅尼に別れを告げ申し、又、尼達に暇乞いして旅装いを整えつつ、その日無二法寺を立ち去りしが、麓の町屋に逗留して、詠えたりし鉄の杖と戒刀が出来終わるを待って居りしに五七日を経て成就せしかば、その杖を突き戒刀を身に付けて、近江よりして信濃路や木曾山伝い遙々と鎌倉指して急ぎける。

かかりし程に百倉長者は日ならず無二法寺へ参詣して、禅尼の情けを喜び聞こえ、地藏堂の破損を修復し、その日傷を付けられたる男どもには療治代を贈りなどして、残る方なく手当てをしければ、皆その功德を感じける。

○さる程に花殻の尼妙達は夜に宿り日に歩み、行き行って信濃の妻籠まで来る時、その日も西に傾きけり。いかで宿りを求めんとて、宿より少し引き入りたるいと大きな屋敷の門の辺に佇んで、「行き暮らしたる修行者に今宵の宿を報謝あれ」と声高やかに訪問えば、内より下男とおぼしき者が一兩人立ち出て「この乞食尼、何をか云う。今宵はここに騒動あり。報謝宿する暇は無し。通るなら早く行け。そこら辺りにまご付き居らば、側杖打たれて後悔せん。さあ行かずや」と罵れば、妙達たちまち怒りを起こして、

「此の痴れ者らが何をか云う。宿を貸さずば借りずもあらんを我に何の咎あって打ち叩かれる目にあうべきか。その訊聞かん」とねじ込んで互いの争い果てしなく、物騒がしく聞こえしかば、主人と見えて一人の老女、齢六十余りなるがしとやかに立ち出て、男共を叱りとどめ、▼妙達にうち向かって、

「尼御前、さのみ腹立てたまうな。今宵は実に私が宿に心苦しき客人あり。されども出家の事なれば、ともかくもして留めはべらん。まずまず此方へ入りたまえ」と懇ろに云いなだめ、母屋に伴い草鞋を脱がせ、夜食をすすめてもてなしけり。

その時妙達は主人に向かって、

「私つらつら御身を見るに、胸に苦勞のあるやらん。顔ばせも常ならず、心苦しき客人あれと云われしはいかなる故か知らせたまえ」と他事も無く問われて老女は涙ぐみ、

「云うても益無き事ながら、今更何をか包みはべらん。我が家は代々村長にて氏は樹郎、私をば大刀自と呼びなしたり。しかるに只一人の家督の倅は世を早うして、嫁も程なく身罷りぬ。後に残るは一人の孫、花松と呼ばれる者。その頃、幼かりしかば、親類に村役をしばらく預け置きたれども、所持の田地も少なからねば、ともかくもして月日を送るに、今年は孫の花松も十六才になりはべり。我が孫なりとて誉めるにあらねど、田舎に稀なる器量良し、女めきたる若衆なり。

しかるに近き頃よりして此の里に程遠からぬ安計呂の山に山籠もりして、数多の手下を集めたる悪たれ女が二人あり。その一人をば億乾通お犬とやらん呼びなしたり。男勝りの荒くれ者にて間無く時無くあちこちの里人を脅かし、兵糧を催促し、或るいは又、旅人を脅かして顔良き女子を奪い取り、売り代なすとも聞こえたり。かくてその億乾通、いつしか我が孫花松に恋慕して、「我が家の嫁となって花松の後ろ見せん、今宵はしかも吉日なり、日も暮れば輿入れすべし、婚礼の用意して待ち候え」と云いおこしぬ。心苦しき客人ありと、先に云いしは此の事なり。察したまえ」と云いかけて零れる涙を拭いけり。

その時、大刀自は涙を止めて、

「只今、告げし訳なれば、御身は今宵、柴小屋にて窮屈なりとも明かしたまえ。彼の人々が来る時、音たてて怪しまれ、辛き目に逢いたまうな」と云うに妙達は頷いて、

「そは気の毒なる事になん。しかりとも聞くが如きはその悪たれめは山賊にて元より非道の奴どもなれば、何故公へ訴えて絡め捕らせて、国ところの災いを払いたまわざる。里には人の無き事か。心得難し」と心問えば、大刀自答えて、

「然ればとよ、彼女らは女子の事ながら武芸力量、男に勝って大方ならぬ曲者なれば、あちこちの野伏、山立ち(山賊)おびたたく、その手に付いて、姉御、姉御と尊敬し、安計呂の山に砦を構えて、国司、郡司(こおりのつかさ)を物とも思わず、云わんや我が此の瘦せ村人の竈の限り尽くすとも彼女らに敵たうべくもはべらず。さればとて公へ訴え申さん事なども国府へ遠き田舎の悲しさ。その往来に日数をいとうて申しいでんと云う者無し。いとばかりある事ながら都では本院様(後鳥羽の院をかく申すなり)が白拍子の亀菊殿とやらんを御寵愛ましまして御政治よろしからず。又鎌倉では頼家卿が色と酒とに溺れたまいて、民の嘆きを見返りたまわず、非道の振る舞いします故にや、あちこちに山立ち(山賊)起って民百姓の憂いをなせり。あなかしこ(決して)※、声高には彼らが噂もしたまうな」と託言がましく囁くを妙達聞いて頭を傾け、

「云われる趣は道理なり。しからば、私が手段を巡らし、お犬とやらんを説き諭し、その婚姻を止めさすべし」と云うを大刀自聞きながら、

「そは喜ばしき筋ながら仏とも法ともわきまえぬ悪たれ人の事なるに、なまじい仕損じれば、毛を吹いて疵を求めん。それは危なし」と止めれば、妙達はうち笑んで、

「その儀は氣遣いしたまうな。私は因果の理を説いて、いかなる猛き男女なりとも邪慳の角を折らせる(改心させる)※事が甚だもって得手者なり。▼かかれれば今宵、此の所へ彼の悪たれ女が来る時、斯様斯様に云いこしらえて松殿とやらを隠し置き、思いのままに酒を飲まして寝屋へ伴いたまえかし。さて臥所には明かりを消して、私はそこにて待ち居らん。億乾通めはかくとも知らず、床入りをするに及んで、予て期したる方便の説法を説きかけて、遂には思い切らせれば、これ災いを払うなり。この儀はいかが」と説き諭せば大刀自大きに喜んで、

「宣う如くなるならば、我が身一家の幸いなり。尼御前、酒を飲みたまうや」と問うを妙達聞きながら、

「酒は飯より好物なり。私が一杯を過ぐす時は一杯の知恵が胸より湧き出でて、又二杯を過ぐす時は二杯ぶりの舌よく回る。まして十杯二十杯、飲めば飲むほど富楼那の弁舌※、立て板の豆も及ばず、御馳走ならば用意あれ」と云うに大刀自うち笑み、下女らを呼んで、「お比丘尼にさあさあ酒を参らせよ」と云うに皆々心得て、日頃用意の酒肴、焼き干の鮎、泥鰌汁、生臭物も取り添えて、出だすを遅しと妙達は大盃にて引き受け引き受け、頭も残さぬ焼き鮎に一口茄子の辛子漬け、精進物より泥鰌汁、「これは奇妙」とぐい飲みの比丘尼に似気無き贗者比丘尼に大刀自は只呆れながら云われし事の頼もしさに花松を呼び寄せて妙達に引き合わせ、孫諸共にもてなしけり。

※あなかしこ：①ああ、もったいない。②恐れ入りますが。③決して。くれぐれも。

※邪慳(じゃけん)の角：鬼も角折るの意味／悪人が何かのきっかけで善人になる事の例え。

※富楼那(ふるな)の弁舌：すらすらとよみなく喋る例え。富楼那は釈迦の十大弟子。

かくて早や、その夜も既に五つの頃おい、安計呂の山の方よりして灯し連れたる提灯、松明、星

の如くに煌めかし、此方を指して来る者あり。大刀自は縁側より早くもこれをとくと見て、「あれは必ずお犬ならん」と云うに妙達は頷いて、まず杯盤を片付けさせ、事よく示し合わせつつ、鉄の杖を引き下げ、その身は一人悠々と花松の臥所に入り、腰衣を脱ぎ、屏風にうち掛け、裳裾を壺折り、腕捲りして絹布の布団の真ん中へ仰向けに寝る大の字なり。待てば待つ夜の長枕、さすがに夢も結ばれぬ、楽屋を隠す真の間、黒闇天女の影向※をさこそとほくそ笑みて居り。

さる程にまだ宵ながら空の色、安計呂の山の億乾通お犬は今宵と定めたる我が恋婿へ押しかけ嫁入り、なおも威勢を示さん為には緋緘の腹巻の上には綾の搔取(打掛)装束、すべらかしたる黒髪の毛筋乱さぬ立烏帽子、黄金造りの太刀横たえて月毛の駒(馬)にうち乗ったる。左右に従う腰元の悪たれ女両三人、その余の悪者二三十人、皆後先をうち囲み、さんざめかして(騒がせて)樹邨の門先狭しと練り寄せれば、大刀自は五七人の老僕、野良男を従えて玄関前まで出迎えて、

「今宵はことさらお日柄も良く、いと有難き御来臨。恐悦至極」と主従が大地に頭を付ければ、億乾通は馬より下りて大刀自を助け起こし、

「刀自よ何とて慇懃なる。私は御身の孫嫁なるに▼さのみ心を置きたまうな。イザ、案内」と急がしたてて、引かれて書院の座に着けば、大刀自ら主従は予ねて用意の酒肴を所狭きまで置き並べ、盃をすすめる程に、家の老僕は次の間にて従い来たる悪者らに酒をすすめてもてなすにぞ、皆々あくまで飲み食らいして、しきりに興にぞ入りにける。

※影向(よいごう): ①菩薩や神が仮の姿で現れること。②貴人などが来ること。

しかれども億乾通は肝心の恋婿の花松が未だ見えねば、心にこれを怪しんで、大刀自にうち向かい、

「我が恋人はいかにかしつる。縁を結ぶ今宵の座敷に影も見せぬは心得難し」と云われて大刀自うち騒ぐ胸を静めて、

「然ればとよ、その事にてはべるかし。早や十六になりたれど、世間知らずのおぼこ者。恥ずかしいとて宵の間より、寝屋籠もりして呼べども出でず。御身自ら彼処に入り、慰めたまえば打ち解けはべらん。無礼は許したまえかし」と真しやかに答えるをお犬は聞いて笑いつつ、

「さて、さて、今時の息子にしては珍しい。もちろん我が身は二十八歳、年は半分違えども男妾にするでなし、わしを大事にして見たが良い。山から通い、夜に泊まって日に遊び、竈の下まで世話したら世界に怖い物は無し。そちこち云う内、夜も更けん。しからばすぐに色直し、寝屋でゆるりと遊びましょう。案内頼む」と床急ぎ、大刀自は可笑しきこらえて、いざとてやがて先に立つ、心奥の間今更に危ぶむ胸の廻り縁、「此方にこそ」と伴って杉戸開いて立ち代わり、

「あの屏風の内にこそ、花松は待ちて居り。ゆるゆる語らいたまいね」と云いつつ杉戸を引きたつれば、億乾通はかかぐり(手探り)※かかぐり屏風を探って、

「さても岩戸籠りの常闇じゃ。吝い(ケチ)と云うにも程がある。今宵ばかりは行灯一つ儉約せずもあれかし」と独り言して忙がわしく、帯解き捨てて着込みの腹巻さっと脱ぎ、そっと置きつつ、寝巻き一つの平紵※しごき、前で結んで、いやらしき身振りも見えぬお先は真っ暗、屏風を上げてしとしとと、ぴったり寄り添う布団の上、▼

「これこちの人、来たわいの。犬じゃ犬じゃ」と妙達が手を引き寄せて、そろそろと腹の辺りを撫で回せば、こそぐったいと云えばえに、岩より硬く妙達は握り拳を振り上げて、お犬の小鬢をはた

と打つ、音もろともに仰け反って「あなや」と叫ぶ程しもあらせず、妙達がばと身を起こし、お犬を掴んで膝に引き敷き、

「淫乱女め、思い知ったか。鳥無き里の蝙蝠（こうもり）とて、汝ら如き牝犬ども、こころに威を振るい、人の息子を慰み者にせんと企みし押し掛け嫁入り。今ぞあの世へ里開き。観念せよ」と攻めつけ攻めつけ、再び拳を振り上げて続け様に打ちこらせば、お犬は息も絶え絶えに

「ヤレ人殺し、者共よ。救え救え」と呼ばれば、手下の悪者漏れ聞いて事こそあれと蠟燭抜き取り、群立ち騒いで混み入ったり。

※かかぐり：①手探りですすむ。たどる。②つかまる。すがる。

※平紵（ひらくげ）：細帯や紐（ひも）などをたいらになるようにくけること。

妙達はこれを見るよりもお犬の襟髪引き起こし、礫に打って遙かに投げ捨て、片方に置きし鉄の杖、かい取り早く打ち振り打ち振り、微塵になさんと競ってかかれば、此の勢いに悪者どもは驚き恐れて、立つ足も無く庭口指して逃げ出るを何処までもと追っかけたり。

その際に億乾通お犬は背戸より逃げ出でしが、身のうち痛み、なかなか走るべくもあらざるに、と見れば宵に我が乗って来た馬が背戸の井戸端の柳の下に繋いであり、これ究竟とうち乗って柳の枝を鞭に折り、打てどあふれど、ちっとも走らず、一つ所に躍りて居れば、お犬はしきりに苛立って、

「この畜生までもが侮って馬鹿にするか」と罵りながらよくよく見れば理や、繋いだままでまだ解かず、「抜かった、許せ」と慌しく端綱を切れれば駆けいだす、月毛の駒も夜の道、恥の皮籠※の蓋ならず、安計呂と云うは己が住む、山を指してぞ逃げて行く。

※皮籠（かわご）：竹や籐（とう）などで編んだ蓋付きの籠（かご）。

○さる程に妙達は逃げる悪者を追い捨て、元の所へ立ち返れば、大刀自は孫の花松と男ども諸共に門辺に立って待って居り。

今、妙達が帰るを見て、そのまま座敷へ伴いつつ、つれづれと顔うち守り、「先に御身は方便で、億乾通に納得させ、この婚姻を止めさせんと云われし故に任せしに、さはせで彼女を打ち懲らし、追い散らしたまいしかば、彼女は必ず恨みを含んで再び押し寄せ来る事あらん。さる時は我が家は皆殺しにせられてん。益無き業をしたまいぬ」と涙ぐみつつうち恨めば、妙達はにっこり微笑んで、

「さのみは思い過ぐしたまうな。今にもあれ、彼奴らが何百人にて寄せ来るとも指でもささせる事では無し。片っ端からうち殺し、災いの根を払って得させん。疑わしくはこの杖をまず取り上げて見たまえ」とて出だすを皆々初めて見るに、鉄を伸べたる磨き杖の握り太なる巖物（いかめしい）造りは貫目もさこそと推し量られ、試みに男ども両三人して上げんとするに動かす事も叶わねば、大刀自、花松その座の者どもは皆舌を捲き、眼を見張って「実に此の比丘尼は凡人ならず、女天狗か荒神※か」と思わざるなんなかりけり。

※荒神（こうじん）：①三宝荒神の略で仏・法・僧の三宝を守る神。②かまどを守る神。

○されば又、億乾通お犬らは命からがら逃げ帰り、

「姉御、仇を取ってたべ。あら口惜しや」と叫びしかば、此の砦の大將の今一人の▼悪たれ女が驚きながら走り出て、事の訳を尋ねれば、お犬は今宵、樹郎の宿所へ赴きし始めより、思わずも寝屋の内にて力猛き大比丘尼に打ち懲らされたる体たらくを斯様斯様と告げ知らせれば、その賊婦は大いに怒って、

「その比丘尼こそ、憎き痴れ者。いでいで我が身が押し寄せて、かい掴み来て恨みを返さん。者ども続け」と云うままに、ひしひしと身を固め、大薙刀を脇挟み、馬にひらりと打ち乗れば、従う悪者百人余り。早や鐘、太鼓を鳴らしつつ、妻籠指して押し寄せれば、億乾通も引き続き、手の者数多引き連れ引き連れ、共に馬をぞ速めける。

○かかりし程に妙達は端近き小座敷にて酒うち飲んで居たりしに、その夜も既に明け行く頃、安計呂の山の方より、貝、鐘、太鼓を喧（騒が）しく寄せ来る如く聞こえれば、

「これ必ず賊婦らが昨夜の恨みを返さんと、多勢を催し来るならん」と云うに大刀自、花松らは驚き恐れて物をも覚えず、いかにせんとして立ち騒ぐを妙達急に押し静め、「いささかも気使いたまうな。いでいで」と云いかけて鉄の杖を引き下げ、悠々然と歩み出て、冠木門を押し開かせて門より外に只一人、寄せ来る敵を待つ程に、真っ先に馬を進めし賊婦は妙達を見るより怒りの声を振り立て、

「汝は何処の馬の骨ぞ。熊野比丘尼の失策か、伊勢比丘尼の年明きか。昨夜はよくも我が妹を木魚の様に叩きしな。我その恨みを返さん為に自らここに向ったり。覚悟をせよ」と罵ったる声もろともにおおなぎなたみずぐるまの如くひらめかし、駆けんとするを妙達は「猪口才すな」と鉄の杖持ち、丁と受け止め、二打ち三打ちと戦う程にその賊婦は声を掛け、「御身はもしや、花殻のお達殿には在らざるか」と問われて妙達いぶかりながら「いかにも我こそ、お達なれ」と云うに賊婦は慌てふためき、馬よりひらりと飛び降りて小膝を付き立て頭を下げて、

「一別以来、恙も無きや。いかに早くも人寄せの友代を見忘れたまいしか」と云うに妙達、眼を定めて見れば真に友代なり。

「そなたは又、いかにして、ここに居るぞ」と問い返せば、友代は答えて、

「然ればとよ、去ぬる頃、甲斐の国にて御身が貝那をうち殺し、影を隠したまいし時、私もその先の日に青善の二階にて共に酒を飲みしにより、同類ならんと疑いかかって絡め捕らんとせられし事、風聞ほのかに聞こえしかば、早くも彼の地を逐電してあちこちと彷徨いつつ、この所を過ぎる折、安計呂の山の辺にて億乾通に出くわして遂に刃を交えしに、お犬は私に勝つこと叶わず、これにより私を山の砦に留めて、第一の座を譲り、その身は第二の大將と成れり。

さても彼の億乾通お犬の事は先代に滅びたる奥の泰衡の家の子（家臣）なりし何がしかの娘なり。女子に似気無き剛の者にて、鎌倉殿（頼朝）を恨むのあまり、その残党を招き集めて安計呂の山に籠もりしなり」と云う隙に、億乾通も馬を早めて来にけるを友代は早く見返って、走り行き囁いて、お犬をそのまま伴い来て妙達に引き合わせ、

「我が妹よ。此の御比丘尼は日頃しばしば物語りし、彼の一拳になまよみ屋の貝那を打ちも殺したるお達殿にて御座するぞや」と云うにお犬は驚いて、

「我々、眼ありながら世に又、比い多からぬ、勇婦にて御座しませし花殻殿とは知らざりし、無礼を許したまえかし」と詫びつつ大地に身を投げ伏してしばし頭をもたげねば、妙達は忙わしく助け

起こして、友代諸共、そのまま書院に伴って、▼大刀自、花松を招き寄せ、

「人々さのみ恐れたまうな。彼女らなりとて鬼女にも非ず。皆、我が妹なりけるぞや」と云うに大刀自、花松らはさては此の旅比丘尼も元より山立ちの仲間なるかと驚き恐れて、又、酒肴を按配しつつ、三人の勇婦をもてなしけり。

その時、妙達は百倉長者の情けによって長く身の罪を逃れん為に、無二法寺にて剃髪せし事、その後しばしば酒に酔い、寺の法度を犯せし故、住持の妙真禪尼の指図に従い、此の度、鎌倉の松岳山龍女寺へ赴く事を友代らに告げ知らせ、又、億乾通にうち向かい、

「お犬よ、我が云う事を聞け。この老女大刀自はその子と嫁を先立てて、只一人の孫花松を家督に後ろ見る者なるに、人柄も相応しからず、又、その年も釣合い難き、御身が嫁になるべきの男妾に致さんのと、無理圧状（無理矢理）※の縁結びは沙汰の限りといいつべし。

何事も我らにめでて此の恋は思い切りたまえ」と云われてお犬は大きに恥入り悔やんで、

「詮無き我が身の誤り。此の婚姻は思い切ったり。もし重ねてこの少年に心を残す事あれば、迅き雷に打たれて死なん。皆の衆、案じたまうな」と矢を折り、誓いを成しければ、大刀自も花松も大方ならぬ妙達が取り計らいを且つ感じ、且つ安堵して、「……今更に疑いし事の愚かさよ」と心の内に恥らって、又、改めて盃をすすめ、益々もてなしけり。

※無理圧状（むりおうじょう）：威圧して無理に自分に従わせること。

かくて友代、お犬らは妙達を伴って、安計呂の砦に帰りつつ、これよりして一兩日、日毎に酒宴を催して様々にもてなす程に、ある日妙達は酔い伏してすやすやと眠りけり。

その時、友代はお犬に向かって、

「御身は何と思うやらん。思い掛け無き客を得て、物の入目（費用）も大方ならず、又、出でて行く時に餞別もせずばなるまじ。これらの損を何ぞにて埋める仕方はあるまいか」と云うにお犬は頷いて、

「我らもしかぞ思うなる。この頃は間が悪くて、ずっしりとした獲物も無し。良き鳥もがな、かかれかし」と託言がましく囁く折から遠見の雑兵走り来て、

「只今、旅人七八人、米と酒とを数多の馬に負わして麓を過ぎる者あり。よって注進仕る」と息接ぎあえず告げるにぞ。友代、お犬は大きに喜び、

「願うところの幸いななり。イデ分捕りせん。者ども続け」と云うより早く身を固め、ひとしく馬を乗り出せば、その手に従う悪者どもは数を尽くして遅れじと、麓を指して急ぎけり。

妙達は始めより空眠りして友代らが云いつる事をよく聞きつ、今又、出て行くを見て、心の内に思う様、

「……友代めが勘定高くて、我らの馳走に物のいるとて泣き言を云いし▼面の憎さよ。彼女のみならず億乾通めも故主の仇を報わん為に義兵を上げると口には云えども、かくまでに汚れたる行いをして猛しと思うは見下げ果てたる奴どもなり。かかればここにいつまで居るべき。鼻を明かせてやらん」と独り言して身を起し、彼の鉄の杖を持ち、所狭しと置き並べたる珠の盃、瑠璃の鉢、推朱（水晶）の盆にぎやまんの銚子、注鍋、青貝の卓袱台まで、一つも漏らさず、皆、粉微塵

に打ち砕き、からからと笑いつつ、忙わしく身拵えして表の方に立ちいでつつ、再び心に思う様、
「・・・今、本道より麓に下れば、必ず友代、お犬が帰り来るに行き会って引き止められれば面
倒ならん。小道もがなど見下ろすに、北の裏手の方にあたっていと傾れたる所あり。これ究竟」と
心で頷き、風呂敷包みを笠もろともに鉄の杖に結び付け、麓の方へ投げ落とし、その身もやが
て三輪組む、膝に両手を組み合わせ、傾れに従い滑り落ちるに、所々に柴生い茂り、砂混じりの崖道
なれど、いささかも身を破る事なく、幾千丈の麓路へたちまち滑り着きければ、先に落とせし杖を
突き立て風呂敷包みを背負いつつ、東を指してぞ急ぎける。

さる程に人寄せの友代、億乾通お犬らは数多の手下を従えて、彼の旅人らを遮り止め、皆逃さじ
と討ってかかれれば、彼の者どもは驚き騒いで、いかにせんとて逃げ迷う。その中に一人の男が笠か
なぐって声高く、

「これは妻籠の里長の樹邨花松が名代にして国司へ参る貢物なり。安計呂の砦の人々が早くも先
の誓いを破り、乱暴したまう事やはある。これ見たまえ」と呼ばはり呼ばはり、小荷駄に指したる小幟
をか取り打ち振り見せるにぞ、友代、お犬は思うに違いて、

「さては樹邨が国府へ贈る貢物にてありけるよな。なお妙達も砦に居るに今更これを乱暴すれば、
誓いを破る謗りを得ん。皆、引け引け」と手勢を止めて、そのまま山路へ引き返せば、彼の者ども
は喜んで再び生きたる心地してしきりに馬を追い立て追い立て跳ぶが如くに馳せ去りけり。

かくて友代、お犬らは山の砦に帰って見れば、妙達は居らずして、盃、盤、皿、鉢一つも残ら
ず、全て微塵に砕けたり。「此はそもいかに」と呆れ果て、妙達を尋ねるに、いずちより出て行きけ
ん。絶えてその影もせず、あまりの事に求めかね、裏手の方に出て見るに、ここより麓へ転び落ち
けん、草は左右へ伸べ伏したり。

「かかる険阻の岨道を容易く麓へ下りしは凡人技には非ずかし。しかるを今更追っかけて引き戻さ
んとするならば、毛を吹き疵を求める(やぶ蛇)なり。由無き奴を留め置き、損せし上に又、損をする
腹立しさよ」と呟くのみ、又、詮方は無かりけり。友代、お犬の事のくだりはしばらく此の下に物
語り無し。

○されば又、妙達はしきりに道を急ぐ程に、安計呂の砦を出でしより、第四日の真昼頃、信濃国の
長窪のあなたなる笹取山の辺まで来にけり。

思いの他に飢え疲れ、走り難く思いしかば、齋を乞わんと欲りすれども此の辺には人里無し。と
見れば山懐の森の内に荒れ果てたる古寺あり。山門より進み入り、本堂に行つて見るに、柱傾き
軒朽ちて、本尊の大仏は後光崩れ落ちて、蜘蛛の巣に纏われ、格天井の天人は彩色剥げて餓鬼の如
く、踏めば落ち入る床の上には狐貉の足跡のみ、斑に見えて人気無し。

もしやと思って庫裡の方に風呂敷包みと笠とを置いて、裏手の方へ行かんと立ちいづる時、仰ぎ
見るに錫杖寺と云う金字の額あり。

されども無筆の事なれば、心をも得ず、本堂の後ろの方に赴けば、いとささやかなる小屋の内に
瘦せさらばいたる尼両三人、木の葉を集め、火を吹いて、麦の粥を焚いて居り。その時、妙達は進
み寄り、

「我は▼近江の方よりして鎌倉へ行く行脚あんぎゃの尼になり。折まから飢えて疲れ果てたり。願ねがわくばその粥かゆを振ふるる舞まってたまわれかし」と云いうを比丘尼びくにら聞きながら、

「御身おんみに振ふるる舞まう粥かゆあれば、我々われらどもがかくまで飢えも疲れもせぬぞかし。今日けふ、三日目さんじつめにてようやくにちとの麦あわを勸化かんげ※しつ、命いのちの蔓つると思おもうて居いるに、由よしも無なき事ことを宣のたまうな」と否いなむに妙達めうたつ心こころを得えず、

「この御寺みでらはしかるべき伽藍がらんなるべく見えながら、などて大破だいぱに及びたる。住持じゅうじは無なきや」と尋ねれば比丘尼びくにら答こたえて、

「然しかればとよ、元此もとこのの寺でらは延命山えんめいざん錫杖寺しやくじょうじと呼ばれたる七堂伽藍しちどうがらんの尼寺にでらなりしに、治承1177年・元暦1184年の兵乱へいらんより、近郷せしやうの施主だんえつ、檀越だんえつがごとく離散りさんして、あまつさえ住持じゅうじの比丘尼びくにも儂はかなく遷化せんげしたまいつ。しばらく無住むじゅうで在ありし頃ころ、鈴懸すずかけの岩莫がんまくと云いう女山伏おんなやまぶし、蛇柳じゃやなぎと云いう弟子でしを連れて同宿どうしゆくとなりしより、彼女かのらはあくまで力強ちからづかく、武芸ぶげいも優すぐれし者ものどもなれば、遂ついには押おして住持じゅうじとなつて仏具ぶつぐ諸道具しよたうぐを売うり代しろなして、只酒しよを飲のみ、男おとこを引ひき入れ遊興ゆうきやうをのみ事こととしつ、始めより居付いきたる比丘尼びくにたちには一椀いちわんの飯いいでも食くわせざるにより、幾十いくじゆ人の比丘尼びくにたちは行方ゆくえも知らずなりになりたり。

しかれども我々われらは年老ねんじやくいて身みに病やまいあれば、いでて行方ゆくえの覚束おぼつか無なきに是非ぜひ無なく残り留のこり留とどまって、兩三りやうさん日に一食いちじきの命いのちを僅わずかに繋つなぐのみ。疑うたがわしくは奥庭おくでんの方かたに行いって見みたまひね」と云いうに妙達めうたつ「さこそ」と覺おぼえて、且かつつ哀あはれみ、且かつつ怒いかり、そのまゝ踵かかとを巡めぐらして、なほ奥深おくふかく赴おもむけば、亭座敷ちんざ敷しきとおぼしき所ところに花筵はなびしを敷しき渡し、果はたして一人ひとりの女山伏おんなやまぶしと麗うるわしき若衆わかしゆとが居いたり。

かくて又また、その弟子でしの女山伏おんなやまぶしとおぼしき者もの、只今ただいま余所よより買かいもて来きにけん、左右さうぶの手てには酒しよ一徳利いちとくと一重箱いちじゆうの肴さかなを携たずえ、これこを床几しよじの辺へに置おきぬ。

※勸化(かんげ): ①仏の教えを広めること。②寄付を集めること。勸進(かんじん)。

妙達めうたつは此このの者ものどもこそ、彼かのの岩莫がんまくと蛇柳じゃやなぎならんと思おもえば、怒いかれる眼まなこを瞠みはって、つかつかと進まみ近づちかづき、

「此このの女おんな金剛こんごうどもが人の寺でらを押し奪うばひ、あくまでに穢けがれたる身みの持もち様さまは何事なにことぞ。我われは行脚あんぎゃの尼になれども此このの本堂ほんだうの裏うらに居いる比丘尼びくにらの物語ものがたりりにて、早はやや汝なんじらが悪事あくごとを知しりぬ。逃のがれぬ所ところと覺悟かくごして、我がこの杖つえを受けよかし」と声こゑを苛いらだ立て罵ののれば、彼かのの曲者まがものらは驚おどいて、

「尼御前あまごぜりやうじ、聊爾ちやうにしたまうな。元此もとこのの寺でらの比丘尼びくにどもが住持じゅうじの無なきを幸あいに良よからぬ業わざをしつるにより、かくの如ごとくに大破だいぱしつるを我が身みようやくとり止とどめて再興さいきやうを図まかるなり。又また、此このの若衆わかしゆは檀方だんほう(檀家)の息子おとこなる者ものにして、たまたま参詣さんぎせられしかば、心ばかりのもてなしせんとて、いささか用意よういをする折せなり。死しに損そないの比丘尼びくにらの空言そらごとを真まこととして事ことを過あやまちたまうな」と、真まことしやかに欺あざむくにぞ、妙達めうたつ「実じつにも」と思おもい返かへして元もとの所ところへ立たち戻かへれば、比丘尼びくにらは既すでにして麦粥あわかゆを食くべ終おわりたる所ところなり。その時とき、妙達めうたつは眼まなこを怒いからし、

「この似非えせ比丘尼びくにらが。その身みその身みの悪事あくごとを人ひとに塗ぬり付け、上手うまくも我あざむを欺かしな。今彼処いまこのにて岩莫がんまくらに事ことの様子かようを責せめ問といにしにより、斯様かよう斯様かようと答こたえたり。かくても云いう事こと、なほあるか」と息巻おとこめかけき猛たけく云いひ懲こらせば、比丘尼びくにらは呆あれ果はて、

「そは御身おんみこそ、彼かのの者ものどもに欺あざむかれたまひしなれ。その若衆わかしゆは鎌倉でんがくの田楽でんがくの色子いろこの果はてにて、岩莫がんまくの男おとこ妾めかけなり。彼女かのらが御身おんみを欺あざむいて一旦いつたんその場ばを帰かへしたは手てに打うち物ぶつ(武器)を持もたぬ故ゆゑなり。再またび彼処このへ行いきたまえば、いかでかそのまゝ帰かへすべき。あら笑しょうし止しや」と呟つぶやくにぞ、妙達めうたつ始はめて心こころに悟さとる

って、腹立たしさに答えも得せず、又、奥庭へ馳せ行く程に早や枝折戸を差し固めたり。

妙達いよいよ苛立って、鉄の杖にて只一突きにぐわらりずんど突き破り、「盗人ども」と呼びかけ呼びかけ、まっしぐらに進み入るを待ち設けたる岩莫、蛇柳。段平物を抜きそばめ、

「食食尼めが又来たな。先には打ち物が無かりし故にわざと透かしていただきやりしに、再び来るは夏の虫、命も既に根腐ったり。覚悟をせよ」と罵って左右等しく討ってかかるを「物々しや」と妙達は右に払い左に支え、発止発止と戦いしが、この時ますます飢え疲れ、かなうべくも非らざれば、隙間をうかがい一足出して、表の方へ逃げ走れば、なお逃さじと、岩莫、蛇柳。山門の並木を越えて、三四町と追いかけしが遂に追いつき得ざりしかば、それより先へは追わざりけり。

さる程に妙達は寺を去る事五六町、日の目知らずと呼びなしたる林の内に逃げ入りしに、この所は幾百の株の赤松、ひま無く生い茂り、枝を交え葉を重ね、絶えて日の目を漏らさねば、昼と云えどもいと暗く、黒目を分かねばかりなれば、日の目知らずと云うなりけり。

その時、妙達は息を付き、汗を拭って▼一人つらつら思う様、

「・・・我、彼の女山伏らに敵し難きにあらねども、かく飢え疲れたりければ、力衰え気力弱って心ならずも敗れ取れり。されども笠と風呂敷包みを下ろして庫裏に置きたりしを取らずば今更何地へ行くべき。さればとて立ち帰らば又もや奴らに苦しめられん。いかにもすべき」と思いかね、しばらくそこに佇む折から向かいの木の間より、いと白やかなる顔を出して遥かに此方を窺がう者あり。

妙達早くこれを見て、

「あれはまさしく山賊ならん、今又、前後に敵を受けてはいよいよ事の難儀なり。まず彼奴から押し片付けて、その上にて思案をすべし」と思えばちっとも躊躇わず、

「只今、我を窺いし盗賊め。さあ出でて勝負を決せよ」と呼ばはれば、たちまち松の木陰より旅装束もやつれたる一人の女子が現れ出て、からからと笑いつつ、

「汝こそ、人をうかがう山賊にてあるべきに、我を疑う事やはある。その儀ならば手並みの程を思い知らせん」と罵って刃を打ち振り走り掛ければ、妙達はいよいよ怒り、鉄の杖を取り直し、互いに怯まず戦う程に旅の女は声を掛け、

「汝の武芸、世の常ならず、且つ、その声も聞きし様なり。名乗れ、名乗れ」と呼ばはるを妙達は耳にも掛けず、なおも進んで戦うを女子はしばしあしらって構えの外へ身を退け、

「逸って過ちせられるな。我が身いささか見覚えあり。御身はこれ花殻のお達殿には在らざるか。かく云うは浮潜龍衣手にてはべるぞよ」と云われて妙達は驚きながら、よくよくすかし眺めれば、実に見知りたる衣手なり。

此は此はいかにとばかりに杖投げ捨てて進み近づき、この所を徘徊しつる事の訳を尋ねれば、衣手答えて、

「私は御身に別れし後、若狭の国に赴いて綾梭殿を尋ねしに、彼の地にも遂に得会わず、もし鎌倉に御座さずやと思うばかりを心当てに遙々東に下りしかども、絶えてその行方を知る事かなわず、詮方も無く取って返して、この処まで来る折、御身に会いしは尽きせぬ縁なり。御身は又、いかにして比丘尼に成りたましい」と問われて妙達少しも包まず、貝那をうち殺せし始めより、今、

鎌倉へ赴く事まで、言葉せわしく説き示し、今日図らずも錫杖寺にて岩莫、蛇柳という女山伏らと戦いしに、飢え疲れたるにより、心ならずも後ろを見せて、ここにて息を付いて居りし一部始終を物語れば、衣手聞いて、

「しからんにはその者共は憎むべき極悪の女なり。私も共に力を合わし、討ち滅ぼして根を絶つべし。まずまず腹を繕いたまえ」と答えて腰に付けたたりし破籠※を開いて与えれば、妙達これをあくまで食らって、衣手と諸共に又、彼の寺に赴けば、岩莫も蛇柳もなお山門の辺の石橋の欄干に身を寄せ掛けて憩いて居り。

その時、妙達は衣手を木陰に隠して独り進んで声を振り立て、

「我、先には飢えたる故に心ならずも遅れを取りしが、此の度は決して許しはせず。覚悟をせよ」と呼ばはれば、岩莫うち見て、ちっとも疑義せず、

「性懲りも無き乞食尼。死にに來たか」と嘲って、討たんと進むを妙達は杖持て発止と受け止めて、二打ち三打ちと戦う程に、蛇柳も又、岩莫を助けて刃をうち振り、引き挟んで討たんとするを衣手は木陰より現れ出て、蛇柳を遮り止めて戦かったり。既にして岩莫は敵に加勢のあるを見て、驚き恐れて乱れる大刀筋に妙達得たりと踏み込み踏み込み、遂に刃を打ち落とし、逃げんとしたる肩先より、背骨にかけて打ち砕けば、蛇柳も驚き恐れて逃げるをやらじと衣手が打ち閃かす刃の稲妻。首は遙か遠くに飛び去って骸は等しく倒れけり。

※破籠(わりご): 携帯用食器。またそれに入れた食物。

▼かくて妙達は衣手と諸共に岩莫、蛇柳らを滅ぼして、ひとしく寺内に進み入り、初め庫裡に置きたりし、風呂敷包みと笠とを取って、又、本堂の後ろの小屋の辺に行つて見るに、彼の両三人の比丘尼らは先に妙達が敗北し、寺門を走りいでし時、その身その身に災いの及ばん事を恐れけん、皆々くびれ死(首吊り死)してあり。

又、彼の岩莫の男妾の何がしは妙達、衣手が岩莫らを遂に討ち滅ぼして、再びここに来るを見て叶わじとや思いけん、井戸に飛び入り死んでけり。

かかれば今此の荒れ寺に住む人としては一人も無し。その時、妙達は衣手を見返つて、

「さしも此の錫杖寺は地藏菩薩の靈場なりとも、かくまで大破に及びしを此のままにして置く時は又、山賊の住処とならん。只焼き払うにます事あらじ」と云うに衣手は頷いて、両人手早く火をさせば、北山風の激しさに見る見る炎は燃え広がって、朽ち傾きし堂塔、伽藍は煙となって失せにけり。

その時、妙達、衣手は山門の辺に立ちいで、しばらくその煙を避けて、各々の行方を語らうに、衣手はとてまかくても綾梭に巡り会わねば、今更に身の縁も無し。戸隠山に立ち帰り、彼の黒姫、女鬼、今板額らにしばしこの身を頼まんとて、遂に別れを告げしかば、妙達も今更に名残り惜しくは思えども、さて、あるべきにあらざれば、又、再会を契りつつ、東西にこそ別れけれ。

○されば花殻の妙達はなおも幾日の旅寝を重ねて、鎌倉の尼寺の龍女寺へ赴いて、知客の比丘尼に対面し、妙真大禅尼の指図に従い、無二法寺より遙々と来る事を告げ知らせ、真如禅尼へ送られた書状を出して見せれば、知客の尼は恠し気に、

「そは気の毒なる事ぞかし。当山の住持の真如禅尼は去ぬる月に移転して、山城の国の深草の女人山

成仏寺と云う尼寺に移りたまひぬ。此は近頃の事なれば、無二法寺の大禪尼はまだ知りたまわずして、此方へ寄せたまいしならん。気の毒ながら引き返し、深草へ赴きたまえ。まだ、ここもとは定まれる住持も無ければ、留め難し」と云うに妙達は詮方も無く、たちまち望みを失って、いと腹立たしく悔しけれども、さてあるべきにあらざれば、此の度は東海道を山城指して急ぐ程に、又、十余かの旅寝を重ねて、深草の里、女人山成仏寺へ到着しつつ、又、しかじかと案内して紹介の状を参らせけり。

その時、住持の真如禪尼は妙真禪尼の書状を検見して、

「此の事いかがあるべき」と諸役の尼たちに問いたまえば、皆々言葉を等しくして

「我々彼の妙達とやらんを見はべるに面魂は世の常ならず、一癖あるべき大比丘尼なり。彼女を当山に留めたまえば、いかなる事をかしたすべき。これも又、計り難し」と云うに禪尼はうち案じて、

「しかりとも我が姉弟子の妙真禪尼が寄せられしをつれ無くはもてなし難し。我は住持の事ながら今参り（新参）の者ぞかし。とにもかくにも御身達、よろしく計らいたまえかし」と、又、他事も無く宣えば、監主の尼らうち案じ、

「しからば彼の妙達を茶園守りになさるべし。茶園は遠くかけ離れ、▼尼たちと交わらず、かつ茶園の辺には柿、梨、桃、栗、葡萄などの果物多し。これにより動もすれば、人が盗むも少なからねば、これらの守りに付けられんに、彼の比丘尼こそ究竟ならめ」と云うに皆々頷いて、「しかるべし」と申すにぞ、禪尼もその儀に従いたまい、さて妙達に對面して、鎌倉まで無駄歩きせし長途の疲れを問い慰め、

「我が寺に今は空いたる役はなし。さるにより茶園を預けはべるなり。園主の役義を務めよかし」と仰せ渡されたりければ、妙達これを不足として、

「私は妙真禪尼の指図に従い、当山へ参りしは首座、監主とも成るべき為なり。しかるをいと下職の茶園守りにせられる事、心得難くはべり」と云う時に監主の尼が進み出て、

「御身自ら思い見よ。沙弥（修行僧）から長老にはなり難し。まず、よく園主を務めれば、次第次第に取り立てて首座にも監主にも成したまわん。今更否お事かわ」と理り責めて説き諭せば、妙達ようやく納得して、次の日茶園の庵室に入院しつ、元の園主と入れ替わり、茶園を支配したりける。

ここに又、成仏寺の裏門前に住まいする悪戯者の女房、娘ら、此の度妙達が茶園守りとなりたる事を伝え聞き、談合する様、

「我々は彼の茶園の果物をうち落として、常に外待（副収入）にすると云えども、園主の比丘尼は威風に恐れて叱り止める事もせざりき。しかるに今度の新役は他所より来たる比丘尼と聞く、一あて当てて懲らさずば、付け上がりのする事もあらん。斯様斯様に計らうべし」とて釣額のお禿と云う悪たれ女が大勢の囃を伴い茶園に赴き、妙達の入院の祝儀に来る由を偽って、肥溜めの辺に誘い、突き落とさんとしてけるを妙達早く気色を悟って立ち寄りながら足を跳ばして、そのお禿を肥溜めの中へはったと蹴落としけり。

※沙弥（しゃみ）：①正式の僧となるために修行している若い僧 ②剃髪しながら、妻帯して世俗の生活をしてい

さる程に釣額のお禿は思うにも似ず、妙達に肥溜桶へ蹴落とされ、「あっ」と叫んで蠢くあり様。手足は白くして新漬けの大根の如く、頭は茶色にして古漬けの茄子に似たり。黄汁が四方へ散乱し、臭さきに鼻も向けられず。落とし紙は目口にへばり付き、紙を吹き付けられたる仁王かと怪しまれ。おさき(汚い)物が惣身にまみれ、黄疸病みの末風呂に入りしかと疑わる。

仲間の悪たれ女らはこのあり様に驚き恐れて「あれよあれよ」とどよめくのみ。鼻を摘み顔を背けて等しく頭を大地にすり付けて、

「尼君、許したまえかし。許させたまえ」と詫びるにぞ、妙達は左右を見返り、からからと笑いつつ、

「此の衞妻どもは肝太くも我をここへ誘き出し、謀らんとせし愚かさよ。なお説き示す事こそあれ。そ奴を早く洗い清めて、引き持て来よ」と云い掛けて、元の所へ退きつつ、座敷におづと押し上がり、豊かに座してうち見て居り。

その時数多の悪たれ女は肥桶を担う竹の杓(天秤棒)※を下ろし、縫らせ、お禿をやがて引き上げつつ、池の辺へ連れて行き、赤裸にして頭の上より、しきりに水を注ぎ掛け、ようやくに洗い落とし、着物二枚着たる者の下着を脱がせてお禿に着せ、皆うち連れて縁側の此方に並びてつい居たり。

妙達つらつら見回して、

「大莫連ども、よっく聞け。おのれらは我が寺の裏門前にて世を渡れば、些かたりとも寺の為には骨を折らんとこそ思うべきに、▼先役の尼を侮り、ややもすれば菜園の茶を盗み、木の実を盗みしは是いかなる道理ぞや。我が手並みをば知りつらん。今日よりして速やかに志を改めずば、一人も残らず肥溜めへ蹴込んで畑の肥やしにせん。さでも懲りぬか、いかにぞや」と息巻き猛く叱り懲らせば、お禿を始め大勢の悪たれ女は頭を縮めて一固まりに額を突き、

「我々眼ありながら夜叉も菩薩も知らずして、今更、後悔謝りはべりぬ。今よりの後、後ろ暗き業などは申すも更なり、御寺の事には骨を折り、御恩をおくりはべりてん。大慈大悲の御庵様、まっぴら許させたまえかし」と異口同音に詫びしかば、妙達はからからと笑いつつ、なおも向後(今後)を戒めつつ、許して宿所へ帰しけり。

かくて兩三日を経る程に、お禿は仲間の囁、娘らをうち集え、談合する様、

「此の度、入院せられたる園主の尼妙達殿は世に多からぬ荒者なり。なれども理強くして折れるに早く我々を許されたる。先度のお礼を申さずば、この後とても良き事あらじ」と云うに皆々「さなり」と同してちとの銭を出し集め、樽肴を調べて、うち連れだつて妙達の庵に赴き由を述べ、その品々を贈りにければ、妙達は大きに喜び、残らず座敷に呼び上げて、樽を開き肴を並べ、我も飲み、人にも飲ませて心限なく語らえば、お禿らは興に入り、潮来節を唄うもあり、口三味線を弾くもあり、果ては簀の子を踏み抜くまでに踊り騒いで日の暮れるまで愉しみ尽くしつつ、皆々ひどく酔いとろけ、暇乞いして帰りけり。

かくて又、五七日を^へ経る程に妙達心に思う様、

「去る日にお禿らが物数多もたらし来て、あくまで我を慰めれば、我も又、ちとばかりの返礼をすべけれ」とて又、酒盛りの設けをしつつ、此の由を云い^{つか}違わせしに、お禿らは斜めならず喜んで、皆連れ立って来にければ、妙達やがて十二畳の客座敷へ招き入れ、^{まね}盃を巡らしつつ、^{さかずき}差しつ押えつする程に、庭に鳥の^{しば}屢鳴く声、いとかしましく聞こえるにぞ、お禿らは^{つまはじ}爪弾きをして、

「あな憎のやもめ鳥よ、仇鳥、喜び鳥来なけ我が宿」と繰り返しつつ吟ずるを妙達は心を得ず、「汝^{なん}達は歌詠みなるか。今のは何と云う事ぞや」と問われてお禿は^{はげ}微笑んで、

「世の^{ことわざ}諺に仇鳥の屢鳴く時は故郷に憂いあり、口説(言い争い)あり。喜び鳥の鳴く時は吉事ありと云い伝えたり。尼君未だ知りたまわずや。今、吟ぜしは一首の^こ古歌にて、憂いを返して喜びを迎えると云う呪いに口ずさみはべるなり」と云いつつ外の方を仰ぎ見て、

「あれ御覧ぜよ。あの大きな柳の木に鳥が巢を掛けたるに、その子が早や大きうなって巢立ちをすべき頃なれば、間無く時無く屢鳴くなり」と云うに妙達^{うなず}頷いて、

「さても和女郎(お前)は物知りなり。実にあの鳥が日毎に鳴いて、かしがましき(やかましき)※よ」と^{つぶや}呟けば、お転婆のお抜と呼ばれる十五六の下衆娘、したり顔にて進み出て、

「所詮はあの巢があればこそ、耳喧しく鳴きもすれ私あそこへよじ登り、取り下ろしはべりてん」と云いつつ、やがて裳裾をかか^{もすそ}げて出でんとするを妙達は忙わしく押し止め、

「止みね。女の木登りは開帳の気遣いあり。手暇を掛けるも面倒なり。我今、柳を引き抜き捨てて、根絶やしをして見せん。いでいで」と云いながら上裳を脱いで大股に早や庭もせに立ち入ずれば、皆諸共に座を立て目引き袖引き守りて^お居り。

その時、妙達は腕まくりして、しづしづと木の元に進み近づき、一ト抱えにも余りたる柳の幹をしっかりと抱いて、力を極めて「エイ」と云う。声諸共にその柳は根こぎにたちまち引き抜かれ、跡には穴ぞ▼出できける。此の体たらくに女どもは肝を潰し、^{まなこ}眼を見張って呆れる事大方ならず、「君は^{まこと}真に弁慶の姉御と云うとも怪しく非ず。此の大木を一ト抜きたまいし力を思うに、百人力にも余るべし。我々、宿世の幸いあって間近く住まいするのみならず、^{ねんご}懇ろにもてなされたる喜び、これに増す事無し。願うは御手に付けられて、何にまれ使わせたまえ。あな凄まじの力や」と舌を巻きつつ^{かんたん}感嘆して諸手を合わせて^お拝みけり。

妙達これを見返りながら抜きたる柳を引き担ぎ、二三十間西の方の広き所へ持て行き倒して、手砂を払って、にっことうち笑み、

「汝達、さのみ徒^{なん}褒めすな。かばかりの^{あだほ}転合(悪戯)※は物の数ともするに足らず。事のついでに我が棒の手の秘術を只今見すべきか」と云うに皆々喜んで、

「実に、尼君の力の程は今、目の当たり見はべりぬ。なお此の上に隠し芸の武術さえ見せたまえば、願うとも^げ難き幸いなり。いざさあさあ」と^{かた}請い望めば、

「そはいと易き事なるに、しばらく待て」と云いかけて、あの^{くろがね}鉄の磨き杖を取り出して、引き下げ来つつ、足場を見たてて外の方の空き地に^と席を敷き渡させて、お禿らに見物させ、六十斤の磨き杖を水車の如く振り回し、自然と得たる棒の秘術を一つも残さず使いにければ、只、稲妻の走るが如く、又は尾花の乱れるに似て、見るに目もくれ心とろけて、前にあるかとする時は^{こつぜん}忽然として後方にあり、一上一下ことごとく法に叶わずと云う事無ければ、お禿らは皆思わずも手を打ち鳴らし、

声を合わして等しくどっと褒めたりけり。

※転合(てんごう):ふさげる・こと。慰み。いたずら。

時に玉椿の生垣との外しろねりの方に白練すりはくの帽子つぼを戴はいて、摺箔すりはく(金箔きんぱく使いい)※の内掛うちかけ衣えを壺折つぼりたる一人の婦人めかけが先の程ほどより佇たたずんで、妙達めいとうの棒ひじゅつの秘術かいまを垣間かきま見て居ゐたりしが、思おもわずも声こゑを發はして「奇妙きせう、奇妙きせう」と褒ほめしかば、妙達めいとうこれこゝろを聞きき咎とがめ、

「今いま、生垣とのあなたにて「奇妙きせう、奇妙きせう」と云いわれしを藤八五文ふじやちゆう※かと思おもいしに、由よしありげなる女中じよちゆうなり。いささかも苦くるしからず、此方こなたへ入いって休やすらいたまえ」と云いうに否いなとも否いなみかね、その婦人めかけは進まみ入りつつ、妙達めいとうにうち向むかひ、うやうやしく小腰ここしをかがめ、

「私わらわはこれまで幾いくばくたりとなく槍棒そうぼう、撃丸げきがんなどの武芸ぶげいを良よくする者ものを見みたれども、君きみが如ごときは世よに稀まれなり。思おもうに幼こき頃ころよりの出家しゆがいにはあるべからず。願ねがうは法名道号ほうみょうどうごう※を名乗なをりり知しらしたまえかし。かく云いう私わらわは為楽院いらくいんの別当べつとうで軟清なんせいの妻さい、名なを桜戸さくらどと呼ばよばれる者ものなり。今日けふは夫諸おつと共にいち稲荷山いねがしに詣よでしに、軟清なんせいは風流ふうりゆうの志こころざし有あるをもて、詩うたを作り歌うたを詠よまんとして今いまなお社やしろに憩いこいて居ゐり。よって私わらわは只一人ただひとり、漫まろ歩あきをする程ほどに、思おもわずも麓ふもとに下くだりてこの所ところまで来きたるのみ。必ずかならず訝いぶかりたまうな」と云いうに妙達めいとう驚おどいて、

「さては予おねて聞きき及およびたる、近おき頃ころまで▼大内おおうち(皇居おんなむしやどころ)の女武者おんなむしや所ところの長ながなりし、虎尾とらのおの桜戸さくらど殿どのにて御座おんざするよな。私わらわは近頃むにほうじ、白川むにほうじの無二法寺むにほうじより転宿てんじやくして園主えんしゆの役やくを務とめはべる妙達めいとうと云いう比丘尼びくになり。故郷こきやうは甲斐かいの府中ふちゆうにて武芸ぶげいを好このみはべりにき」と云いうに桜戸さくらど頷うなづいて、

「しからは、彼かの一拳ひとこぶしになまよみ屋かいなの貝かい那な後ご家けをうち殺ころしたまいぬと、世よの風聞ふうぶんに予おねて聞きく、武田殿むちだんのの身内人みうちんにん、花殻はながらのお達殿おんみとは御身おんみが事ことに御座おんざさずや」と小聲こゑで問とえば、妙達めいとうは頭こゝろを撫なでて、「それなり、それなり。今いま凶おもらずも面おもてを合あわして年来さかざきの望まみ叶まえり。まず盃さかずきを参まらせん」とてやがて座敷ざしきに伴ともえば、桜戸さくらども又また、喜よろこんで、

「片身かたみ(互たがひ)に名なのみ知しりながら対たい面めんするは無なかりしに、今いま凶おもらずもここへ来きて一つ席むしろに連つなりはべるは宿世すくせ(因縁いんげん)あつての事ことなるべし。願ねがうは今いまより義ぎを結むすび、我われが姉あねとこそ思おもうべけれ」と云いうに妙達めいとう一議いつぎに及およばず、

「そは又また、私わらわも願ねがう事ことなり。さらば、まず盃さかずきを」と云いいつつ飲のんで、桜戸さくらどに差させば、又また、桜戸さくらども受うけてぞ返かへす互たがひの式礼しきれいなお喜よろこびを尽つくす折せから、桜戸さくらど夫婦ふうふの伴ともに立たちたる錦二きんじとか云いう小奴こやっこが忙いそわしく尋たずね来て、

「奥様おくさまここに居ゐたまうか。只今ただいま、稲荷いねがしの鳥居とりい先さきにて旦那様あまたが数多じよちゆうの女中なんぎに取り困こまれて、いと難儀なんぎに見みえたまえば、御身おんみに知しらせ奉たてまつらんと思おもうばかりにあちこちと尋たずね巡めぐって候まなり。さあさあ行いかせたまえかし」と告つげるに桜戸さくらどは驚おどきながら妙達めいとうにうち向むかひ、

「聞きかせたまえし訳わけなれば、此こゝろのまま別わかれはべりてん。私わらわの宿所しゆくしょは知しって御座おんざさん。都みやことは云いえど間近まぢかき程ほどなり、必ずかならず訪とわせたまえかし」と云いうを妙達めいとう聞ききながら、

「御身おんみの殿御とのごに難儀なんぎがあれば、私わらわも行いって仇あだする奴やつらを叩たたき散まらして参まらすべし」と云いいかけて、早はやや立たたんとするを桜戸さくらどは急いそに押おし止とめて、

「相手あなごは女子おんなごの事こととし聞きくに、何事なにごとかはべるべき。只ただうち捨すてて置おきたまえ」と云いいつつやがて座ざを立たって暇いとま乞こいして出いて行いけば、錦二きんじも主しゆの尻しりに付つき、稲荷山いねがしを指さして走はりけり。

そもそもこの桜戸さくらどは元もとの為楽院いらくいんの別当べつとう、剛詮法橋ごうせんほっしやうの娘むすめなり。その頃ころ、為楽院いらくいんと聞きこえしは北辰ほくしん

妙見(妙見菩薩)の権者※にて代々肉食妻帯なり。しかるに桜戸は女子に似気無く武芸を好んで、幼き頃よりこれかれと、その師を選んで学びしかば、年十三四の頃よりして女武者所へ召されつつ、采女にてはべりしに、武芸いよいよ上達して肩を並べる者も無ければ、なお未熟なる采女らの指南の事さえ仰せ付けられ、彼の亀菊の手に付いて大内にありけるに、父剛詮が身罷って家を継ぐべき男子なれば、桜戸が身の暇をたまり、軟清と云う弟子を婿養子に縁組みて、桜戸をぞ妻合わせける。

かかりし程に軟清は世に多からぬ美僧にて、心様さえ男に似ず、殊に内気の者なれば、色好みなどはせず、何事も桜戸に及び難しと思う故にや。表ばかりは夫なれども下心には姉の如くうやうやしくもてなして、仇なる心は無き者なり。しかれども桜戸はたえて夫を侮らず、常に敬いかしづいて、その足らざるを補いければ、世に珍しき夫婦なりと云わぬ者なん無かりける。

※摺箔(すりはく): 金箔と接着剤を用いた衣類の装飾技法。

※藤八五文(とうはちごもん): 江戸市中で五文の菓を売り歩いた菓売り。二人連れで、互いに「藤八」「五文」と応じ合い、最後に声を合わせて「奇妙」と叫び、評判となった。

※法名(ほうみょう): 僧や俗信徒となった者に与えられる仏教徒としての名前。戒名。

※道号(どうごう): 僧侶が付ける号。僧侶の名である法号(戒名)の上につけられる。

※宿世(すくせ): ①前の世。前世。②前世からの因縁。宿縁。宿命。 ※権者(ごんじゃ): 仏や菩薩が仮の姿で現れたもの。権化。

これはさて置き、亀菊は一院の御寵愛ますます盛りなりければ、勢い女御(皇后候補)※に異ならず、こと皆己がままにして忌みはばかりの由も無ければ、ここの遊山、彼処の物詣でなどとして出で歩く事がしばしばなりしが、この日は深草の里近き稻荷山にぞ詣でける。

洛外忍びの物詣でとして供人などはやつされ(目立たぬように)たれども、なお数多の女乗り物、この他雑色下部の輩、四五十人の供人あり。

これらは麓に残し置き、腹心の女房と女の童をのみを従えて社へ詣でし下向(下り)道。と見れば、為楽院の軟清が鳥居の辺に只一人、つくつくとして佇みたるを亀菊ひそかに懸想(恋慕)して、「類い稀なる美僧かな」と、思えばぞっと恋い風が身にしみじみと行きも得やらず、心知りたる長女(女官)を招いてしかじかと囁き示せば、長女は早くその意を推して、軟清の辺に立ち寄って、「何処の聖か知らずはべれど、私の主が忍びやかに物云わん」と宣うなり。

「此方へこそ」と馴れ馴れしく、徐ら手を取り引き立てて連れて行かんとしてければ、軟清▼驚き、顔うち赤らめて、

「此は卒爾(そつじ)ばしたまうな。それがしはさる者にあらず。許したまえ」と袖うち払って逃げんとすれば、数多の女房がおっ取り込めて動かせず、様々にこしらえて脅しつ賺しつ挑めども、軟清は神木の青葉の紅葉に縫り付き、従うべくもあらざりしをなお手を替え人を替え、口説くこと半時ばかり。

されども軟清は応えもせず、許したまえと云うのみなれば、人もや来んと五七人、前後左右に立ちかかり、割無く(訳無く)手を引き背中を押して、辛くして亀菊の辺近くへ引き寄せれば、亀菊は緋扇にて面を覆って、なよやかに白き腕を差し伸べて軟清の手を押し握り、「時雨する、稻荷の山のもみじ葉は青かりしより、思い染めてき」と詠みたる歌もあるものを心強きも程こそあらめ。色良い返事を聞かせてたべ」と云うに軟清は頭をうち振り、

「やんごと無き(高貴な)※方様の忍び詣でと見奉るに、などてや青天白日に出家人を引きとらえ、妄りがわしく聞こえたまうぞ。早く放して帰させたまえ」と云えども聞かず亀菊はなお引き寄せん

とする程に、桜戸が早く走り着き、と見れば、夫軟清を理無くも引き捕らえ、ひたすら口説く手弱女は見忘れもせぬ亀菊なれば、再び驚き、且つはばかりて、はしたなくはこれを止めず、うやうやしく近づいて、

「此は棕橋殿にて御座せしな。何故にその者をひどく苦しめたまうにか」と云えば亀菊は気色を変えて、

「誰なるらんとお思いしに、為楽院の桜戸か。私は俄かに右の手が痺れて痛むに詮方無く、此の聖に逢ったは幸い、加持を頼んで居るものをそなたの構う事には非ず」と云うに桜戸微笑んで、

「今だ知ろし召されずや。そは我が夫の軟清なり。例え加持に召されるとも、司々のことわり無くて参るべき事にはあらず。まいて、かかる物詣での道にて近づき奉らば、人聞き悪く後難あらん。いざ、こちの人帰りたまえ。長居は恐れにはべらずや」と云いつつ自ら引き立てて麓の方へ急ぎけり。

ここに至って亀菊はその美僧が桜戸の夫軟清なりけりと、初めて悟って驚いて、且つ恥じ、且つ憤りに耐えざれば残り惜しさも一入なれども、飛ぶ鳥だにも落ちると云う我が勢いにも詮方無きは道ならぬ恋なるをもて争い難く、おめおめと放ちやりつつ、うっとり、しばしそなたを見送りしが、さてあるべきにあらざれば、その夕暮れに都へ帰りぬ。

※女御（にようご）：①天皇の寝所に侍した女性。皇后候補。②上皇・皇太子の妃。

※下向（げこう）：①高い所から低い所へ下りて行くこと。②都から地方へ行くこと。

※懸想（けそう）：異性に思いをかけること。恋慕うこと。 ※長女（おさめ）：平安時代、宮中で雑用をした身分の低い女官。

※宰領（さいりょう）：①多くの人を取り締まること。②中世以降、運搬する者の監督役。

※割無く：道理なく。訳なく。 ※止んごとなき：主に、高貴の身であるという意味の古語。

これよりの後、亀菊は只、軟清の事を忘れんとするに忘れられず、しきりに悶え憧れて、宮仕えも物憂さにしばらく病に託けて引き籠もりてぞ居たりける。ここに又、陸船と云う女鍼医あり。此の年頃、大内の局々へ参りしに、勢い付いて利を計る世にたくましき女なれば、いつしか亀菊に諂って、後には他の局へ行かず、これにより亀菊は全て内証（内々）の用向きを陸船にのみ委ねしに、萬に才覚ある者にて何事をも良くせしかば、亀菊深く愛で喜んで、彼女の夫を尋ねしに、富安触太夫と云う浪人にて東山の方辺に童の手習いの師匠となつて、かすかに暮らすと聞こえしかば、亀菊は遂に取り立てて此の触太夫を局付きの雑掌（雑務役）にぞしたりける。

この故に陸船夫婦は常に亀菊の辺を離れず、いよいよますます媚諂って出頭してぞ務めける。かかりし程に陸船は亀菊が人にも告げぬ物思いある気色を推して、人無き折をうかがいつつ、辺近くに進み寄り、

「いかなる事のはべりてか。物思わしく見えさせたまうをなぞで私に隠させたまうぞ。世に為し難き事なりとも、あわれしおわせはべらんものを」と恨み顔して囁くにぞ、亀菊にっこと打ち笑みて、「さては薄の穂にやいでけん。そなたに包むべくもあらず。我が物思いはしかじかぞ」とて稻荷山の事の趣の一部始終を告げしかば、陸船聞いて小膝を進め、

「彼の桜戸がその始めに女武者所に在りし時、私とは疎くもはべらず、今も折々療治の為には為楽院へ行きはべれば、謀るにさのみ難くもはべらず。まず触太夫をも呼ばせたまえ。談合すれば良き知恵いでん」と云うに亀菊喜んで、その夜又、陸船と触太夫を呼び近づけて事の機密を示しつつ、

「謀り事もやある」と問うに舳太夫は頭を傾けて妻の陸船諸共に肝胆(胸中)※を吐き、額を合して密談時を移しけり。

※肝胆(かんたん): ①肝(きも)と胆(い)。②心の中。真心。

○さる程に桜戸は去ぬる頃、稻荷山での亀菊の体たらく、いと浅ましく腹立たしきを人に告ぐべき事にあらねば、只、胸にのみ違る瀬も無くて十日余りを送る程に女鍼医の陸船がいと珍らかに来にければ良き折なりと対面しつつ、

「此の頃は気が結ばれて何となく心良からず、療治してたべ」と云うに陸船は脈を見て鍼を刺すこと半時ばかり、さて桜戸に向かって云う様、

「御身の病は気の方なり。療治は保養にます事無し。近頃、五条の功德庵にて千体仏の曼荼羅をいとよく織ると噂に聞きたり。いざたまえ行って見ばや」と唆せば、桜戸も「実にも」と思つて夫軟清に由を告げるに、軟清聞いて、

「しからんには錦二を供に連れたまえ」と云うを陸船は聞きながら、

「忍び歩きの事なるに、供人あつては却つて悪し。私が伴い参らせるに何事かはべるべき」と云うにそれすら否みかね、うち連れ立って出て行きけり。

此の時に日は傾いて七つには程もあらじと思ふ頃おいなれども、陸船は予ねてより道にて時を移さんと計りたる事なればあちこちへ立ち寄つて、商人の棚の物をうち眺めなどせし程にようやく五条へ至りし頃、はや黄昏になりけり。

かくてその功德庵へ行って様子を尋ねるに、千体仏を織る事は跡形も無き空言にて人氣は絶えて無かりしかば、桜戸は興を失い、立ち帰らんとする程に、陸船は何地行きけん、たちまち見えなくなりけり。

「厠を借りに行きしにや」と思えばしばらく佇む程に、既にして日は暮れたり。

折ふし宵闇なりければいとど帰方のおぼつかなきに▼又、陸船を待つに及ばず、独りそこより道を急いで、五条の橋の辺まで来ける時、向こうに見える提灯は我が家の紋を付けたれば、もしやと思つて近づくまに、

「そは錦二にはあらずや」と問えば「然なり」と答えたり。「迎えに来しか」と再び問えば錦二は息を付きあえず、

「奥様、早く帰らせたまえ。先に御身の留守の程、陸船殿より人をもて、桜戸様は途中より俄かに瘧えが差し起こり、行き悩みたまうにより、私の宿所へ伴つて様々に療治しはべれど、いと危うく見えさせたまえば事の由を告げ参らす。軟清様、さあさあ来まして看取りたまえ」と云わせしかば、法橋(軟清)様は驚いて我らを供に召し連れたまひ、大和橋の辺の陸船殿の宿所を指して走り着きたまひしは黄昏頃の事なりき。

その時、陸船殿の夫なるべし、齡は五十ばかりの憎さげなる人が出迎えて奥へ伴い参らせて、何事やらん囁くに旦那はそれを聞きたまわず、

「我が妻の急病などと偽り、我らを引き寄せ、邪淫の取り持ちせられる事、心得難し」と宣いしをほのかに漏れて聞きたるにより、その偽りは知られたり。

此は只事に非ずと思えば、その宿所を走り出て五条と聞きしを心のあてに告げ申さんとて参りしなり」と云うに桜戸は驚き怒って、「さらば急げ」と云うままに、錦二が遅れん事を思つて、その提灯を自ら取ってひたすらに走る程に、四条河原の辺にていと重たげなる葛篋を背負つて頬冠せし一人の武士に端なくも行き会いしに、彼は灯を厭うとおぼしく、たちまち道を横切つて、避けんとしたる葛篋の内より、帯の端が下がりしを桜戸目早くきつと見るに、綾の織り出し染色まで、よく軟清の帯に似たれば、

「曲者待て」と呼び掛けて、葛篋をしかと引き止めれば彼方も早く身をひねり、刀を抜かんとするところ、桜戸すかさずつけ入つて脾腹をはたと当てしかば「あつ」と叫んで打ち下ろす、葛篋と共に倒れけり。

桜戸得たりと走りかかつて蓋を開けんとする程に、頭中に面を隠せし女が後ろの方より走り来て、ひらりと引き抜く懐剣の光りに桜戸身を沈まして、空を討たせし早速の働き。その隙に倒れたる彼の曲者も身を起し、葛篋を捨てて斬つてかかるを桜戸はあちこちとかい潜り、生け捕らんと思ひしかども、身に寸鉄(小刀)を帯びざれば小石を挿んではらはらと、うち出す手練の礫に男女の曲者打ちしらまされ、叶わじとや思ひけん。跡をくらまし逃げ失せたり。

桜戸これを追わずして、捨て置きたりし葛篋の紐を引き解いて、蓋をかき取れば、内より出づる優法師は果たしてこれ桜戸の夫軟清なりし事、なおつぶさには次に見えたり。

その時、軟清は葛篋の内より立ち出て、呆然として辺りを見返り、「思いがけなや。桜戸はいかにしてか、我が此の難儀を早くも救いたまいたる。そも又、ここは何処ぞや」と問えば桜戸、

「然ればとよ、先に私は陸船に欺かれつつ五条まで、彼の曼荼羅を見に行きしに、跡形も無い空言にて陸船はその黄昏に小路隠れ(雲隠れ)※をしてければ独り疑い迷いつつ、立ち帰らんとする程に、錦二が御身の供先より私を尋ねて来るに会いぬ。これにより彼奴夫婦が深くも企みし事の趣を大方ならず聞こえしかば、飛ぶが如くに陸船の宿所を指して来る折から、怪しき葛篋を背負うたる曲者に出会いしに、葛篋の蓋の間より垂れ下がりたる帯の端は見紛うべくもあらざりし、御身の帯に似つるにより、「曲者待て」と引き止めて挑み争うその程に一人の女が走り来て、懐剣ひらりと引き抜いて彼の曲者を助けつつ、私を討たんとしたれども、叶わじとや思ひけん、遂に葛篋をうち捨てて二人共に逃げ失せはべりき。思うに葛篋を背負ひしは彼の富安舳太夫にて、後より来るは陸船ならん。しからは御身は囚われて葛篋の内に御座するならんと推量せしに露違わで、端なくここにて取り返したる喜ばしさよ」と物語れば、軟清も又、舳太夫に欺かれたる事の趣を斯様斯様と告知らせ、

「彼の舳太夫が有無を云わさで我を葛篋へうち入れて、此の宵闇に背負い出せしは人知れず亀菊殿の局へ伴う為なるべし。しかるを御身に救われしは我が運命の尽きざるところか。我もし彼処へ虜とならば慰み者となるのみならず、命も遂に絞りに取られて再び会う日の無からんに、今に始めぬ事ながら御身の手並みは武士にも勝れり。しかるを舳太夫、陸船らが叶うべきことかは」と云うを桜戸押し止めて、

「ここは途中の事にして舳太夫らの家路に近し。詳しい事は宿所にて聞きもせん云いもせん。いざ

諸共に」と急がす折から錦二もようやく追いつきければ、いざとて提灯下げさせて仇を恐れぬ勇婦の振る舞い。夫を守って二鞘※の家路を指して帰りけり。

※小路隠れ(こうじがくれ)：①しばらく他所に雲隠れすること。②かくれんぼ。

※二鞘の(ふたさやの)：二本の刀を入れる鞘は間に隔てがあるので、「隔つ」にかかる。

○さる程に桜戸はその夜もすがら思う様、

「・・・亀菊殿は殊更に素性卑しき者なりければ、行い様の正しからぬもさあるべき事ながら勢い高き今にして、そを咎めるべき由も無けれど、陸船はこの年頃、親しく交わりたりけるに、此の度の振る舞いは人たる者の業ならんや。彼奴夫婦を引き捕え、思いのままに責め懲らさずば、又、此の上にかばかりの企みを成さんも計り難し。要こそあれと心には思うものからしかじかと、夫に云えば止められん、よく責め懲らして後にこそと思案をしつつ次の日より、物詣でにかこつけて、東山の陸船の宿所に行って会わんと云うに、彼の女は居ること無く、その夫の舳太夫すら此の頃は椋橋殿の御用に暇無きをもて、家に居る日は稀なりとて留守居の下部のみ居たり。

「さては彼らは我を恐れて院の御所へや参りけん。亀菊殿の局の内に深く隠れて居るにもせよ、いつまでか帰らで在らん。出し抜いて不意に來れば会わずと云う事あるべからず」と思案をしつつ、何とも云わで、その日は宿所に立ち帰り、これよりの後、三四日づつ間を置いて彼らを訪いしに、▼その行く毎に陸船夫婦はまだ帰らずと聞こえしかば、所詮途中でいで会わずば会う事いよいよ難かるべしと思いにければ、その後はなお又、事に託つけて都の内をあちこちと、折々出掛け歩けども陸船も舳太夫もいよいよ隠れて影だに見せず、軟清は桜戸が近頃しばしば出歩くを心得がたく思いかば、人無き折に囁く様、

「御身は日頃、花見遊山に出歩く事など、さのみは好みたまわざりしに、去ぬる日我が身に事ありしより、ややもすればあちこちと漫る歩きをしたまうはもし陸船らに在りし夜の恨みを返さん為にはあらぬか。しからんには毛を吹いて瑕を求める(やぶ蛇)類いなるべし。彼の輩は亀菊殿の腹心の者にあらずや。例え此方に理ありとも、亀菊殿に憎まれれば、その理は遂に非にこそならぬ。只うち捨てて置きたまえ」と託言かましく諫めたる夫の言葉は不甲斐無けれど、道理無きにあらざるに、桜戸は陸船らを尋ねわびたる折なれば事ようやくに思い返して、これより心も緩みつつ、又、尋ねんともせずなりしに、深草より花殻の妙達が訪い来て、酒飲み遊び暮らす事、早や兩三度に及びしかば、桜戸はこれにまぎれて、彼の憤りも何時となく忘れし如く日を送りしに、彼の花殻に訪われし事も再び三度に及びしをせめて一度は訪れて彼処の安否を問えばやと、思えば由を夫に告げて錦二を具して、深草の尼寺へとて行く程に、妙達が此方へとて出でて来るに行き会いけり。

互いにしばし立ち留まり、つつが無きを祝しつつ、桜戸は我が宿所へ伴わんと云いつれども、妙達は又、桜戸がたまたま訪わんと思ひし由にて道までいでし事なれば、今日は此のまま我が庵へ伴うべしとて誘いつつ、遂にそこより取って返してうち連れ立って、深草の成仏寺を指して行く程に、年は三十余りにて旅やつれせし一人の女が桜戸の先になり後になりつつ、これも又、深草の方に赴く程に、「今日のみと、見るに涙の増鏡、馴れにし影を人に語るな」と云う歌を幾度と無く繰り返して、ひたすら嘆息したりしかば桜戸はこれを聞き咎め、心の内に思う様、

「……あの女が吟ぜし歌は昔三河の前司大江の定基さだもとが年頃、逢い慣れたる女が病んで空しくなりけるをひどく悲しみ嘆いて、世を捨てばやと思ひし折、何処とは無く貧しき女が鏡を売らんとて、もて来しかば、定基は取ってこれを見るに、一首の歌を書いたりけり。その歌は今あの女が吟ぜしと相同じ、これらの由は我が夫が折々に読みたまう沙石集しゃせきしゅうに見えれば傍聞かたへして我さえ知れり。しかるに彼女が今ひたすらにその歌を吟ずる事、故こそあらめ」と思うにぞ、たちまちに呼び止めて、

「いかにそなたは何の故ゆえに古歌をしばしば吟ずるぞ。もしや年頃秘蔵する鏡を売らん為ならずや」と問われて女は驚きながらうやうやしく小腰をかがめ、桜戸にうち向かい、
「御推量すいりょうに露違つゆたがわず、親の形見の鏡あり。又、一振りの短刀あり。身たつきの方便無きままに売らばやと思えども、さすがに卑いやしき者の手に渡す事の口惜くちおしさに明らさまには告げずして、沙石集しゃせきしゅうの歌を吟じて洛中らくちゅうをさまよい歩き、歌の心をよく知って買わんと云う人があるならば、その人にこそ売り渡さめと、思いにければ五七日、かたの如くに呼び歩けども、何ぞと問う人無かりしに、賢うも我が売り物を知られぬるぞ、喜ばしき」と云うに桜戸うなずは頷いて、

「その売り物は何処にあるぞ」と問われて女は忙いそわしく背中に負おいし風呂敷包ふしみを解き下ろし、うち開き、まずその鏡をい出しつつ、「これではべる」と差し寄せるを桜戸取ってよく見るに、直径は七寸ばかりにして裏には波うさぎに兔うさぎを鑄たるが、その良く物を照らす事、月の如く氷に似たり。又、短刀を出させて見るに、長さは九寸余りにして焼き刃の匂い得も云われず、あはれあ得難えがたき切れ物なると、思うに手さへ離かしかね、又、彼の女にうち向かい、

「値安あたくば二品共ふたしなに、私わらわが買わんとするなり」と云うに女は喜んで、
「只今も申せし如く、値良あたく買う人ありとも麦をも豆をもわきまぬ心無き輩ともがらの者とせんが口惜くちおしさに人さえ選えらみし事なれば、五十金にもなるべき物の今その半なかばを引き下げて、一品を十五づつ、三十両にて売りはべらん」と云うに桜戸こうべは頭を傾け、

「そはそれ程の物でもあらんが、私わらわも女子おなごの事なれば余りに値貴あたいたくては夫にも告げ難し。一品を十両づつ、二十両にて売るならば異議なく買わん。いかにぞや」と押されて女も小首を傾け、
「そは又、あまりに安くはべれども私わらわも俄にわかに入用にゆうようの事もあり、詮方せんかた無く秘蔵ひぞうの品を売る仕儀なれば欲まいを離れて参まゐらせん。せめての事に壺両増して涙金なみだとしたまわれかし」と云うに桜戸うなずは頷いて、

「さばかりの事ならば、ともかくもして取らせんが、そもそもそなたは何処の人ぞ。鏡も剣も昔より持ち伝えしに相違そうい無きや」と問うを女は聞きながら、

「そは云われるまでもはべらず、私わらわは鎌倉の者にはべるが、うち続きたる仕合わせ悪くて、夫に後れ子を先だてて、寄る辺の島も無き身ながら、此の都にはちとばかりの縁ゆかりの人の在るにより、身の片付きを頼たのまんとて遙々上りし甲斐も無く、その人は去年の春に身罷こぞりにきと聞こえしかば、進退しんたいここに極いすちまって何方行かんも路用ろようは尽きたり。

※大江定基（さだもと）：平安中期の僧。円通大師の号をおくられ、通称は三河入道。

※沙石集（しゃせきしゅう）：鎌倉時代の僧無住の編集した説話集。梶原氏の出と云われる。

世せんかたに詮方せんかたの無きままに、身にも替えじと思ひぬる此の二品ふたしなを売り代しろなして又、鎌倉へ帰るなる心細さを察したまえ」と云いつつ、涙を押し拭えば、さこそと思う桜戸もそぞろに哀れをもよおして

「さらば値を取らせんに、私と供に来よかし」と云いかけて忙わしく妙達にうち向い、
「只今知られる訳なれば、私はあの女子を連れて▼宿所へ戻り、値を取らして、後より御寺へ参るべし。御身は先へ帰らせたまえ」と云うに妙達空うち仰ぎ、
「既に日陰も回りたり。しからば今日はここにて別れて、又、遠からず訪れはべらん。御身も今日は宿所に帰って、又、近き日に直したまえ、今日のみに限ることかわ」と云うに桜戸は否みかね、
「しからば仰せに任せはべらん。由なや物を買わんとて、ここにて別れる本意無さよ」と云うをば聞かで、妙達は立ちくたびれし事なれば暇乞いすらそこそこに別れて寺へぞ帰りける。

その際にその女は手早く鏡も短刀をも錦の袋に押し入れつつ、又、風呂敷に引き包めば、桜戸は先に立ってやがて宿所へ伴いつつ、さて軟清に由を告げるに、その身は婿の事なるに、年頃、萬事の賄いも妻に任せる事なれば、いささか拒む気色無く、
「御身が愛ずる物ならば、さあ買ったまえ」と云われるに、桜戸は嬉しくて、さてその値を取らせつつ、彼の二品を買い取りければその女は喜んで、旅宿へとてぞ帰りける。

さる程に桜戸は鏡と剣を袋より徐ら出だして取って見つ、或るいは掛けて眺めるに、初め見しにはいや増して、世に稀なるべき宝なれば愛で喜んで思う様、
「・・・先頃、一院より亀菊殿に賜りし宝剣は目出度き物ぞと世の風聞に聞きたれども、今日求めたる短刀はをさをさそれにも劣らじ物を」と一人心に誇りつつ、さて軟清にも見せしかど、武器を嗜める者ならねば、さのみはよくも見ざりけり。

かくて、その明けの朝、椋橋の局より走り使いの雑色が来て、
「亀菊殿の仰せなり。桜戸は近頃、良き鏡と短刀を求められしとほのかに聞きぬ。此方にもさる物あればいずれが劣るや優れるや、比べて見んと思うなり。さあさあ持参あるべし」と俄かに下知を伝えしかば桜戸は深く訝って、
「・・・我、彼の品を買い取りしは僅かに昨日の事なるに、亀菊殿はいかにして早くもそれを知られけん。心得難き事なり」と思えども今更に隠すべき事にもあらぬを我が身が女武者所にはべりし時は彼の人の手に付いて勤めたることしもあれば否むに由無く、下知の趣をしかじかと軟清に▼告げ知らせ、俄かに衣装を整えつつ、その使い諸共に彼の局へぞ参りける。

その時、一人の老女出て、「いざ、此方へ」と案内をしつつ、広き屋敷に伴いしが、椋橋殿はここに御座さず、彼方にこそと先に立って、又、幾間をかうち過ぎつつ、いと奥深く伴いしが、「否々、ここにも御座さぬなり。必ず彼処に御座すならん」と云いつつ、再び先に立ち、いよいよ奥へ誘う程に三十五畳を敷き渡したる一間の内へ伴って、「しばらくここにて待たたまえ。只今、御いであるべきに」と心得させて、その老女はそのまま走り去りにけり。

桜戸は携え来る彼の鏡と短刀を手を持って膝にうち乗せ、亀菊が出でて来たるを今か今かと待つ程に、何心無く辺りを見るに、南面に上段あり、そこには御簾を掛けられたるが、左の柱に一面の鏡を掛けて辺りを照らせり。只右の柱には鏡掛けの釘のみあって、それには鏡を掛けられず、その上段の正面に岩戸局と印したる大字の額を掛けてあれば、桜戸は大きに驚き、

「此、岩戸局と云えるは一院万機※の政治を聞き召す所にして、只人が参る所に非ず。あの老女は何故にここへは伴いたるやらん。そぞろなりき（不注意）」と恐れ迷って退きいでんとする程に、思い掛け無き後ろの方に亀菊は早やうち見て居り、たちまちに声を掛けて、

「桜戸は何の為にここへは漫ろに参りしぞ。しかも剣を携えたるは逆心あつての事ならん」と云いつ、向かいをきつと見て、

「あら不思議なる事こそあれ。高御座に掛けられたる日月の御鏡の月の方が無くなりしは察するところ桜戸が盗み取れるにあらんずらん」と云われて桜戸は

「此はいかに」と、いよいよますます驚きながら悪びれもせず膝まづき、

「御局様の仰せなれどもそれは事違えにはべるべし。私は昨日ゆくりなく（思いがけなく）、この鏡と短刀をある女より買い取りしに、何人が告げ申せしにか、御身が御覧あらんとて携え参るべき由の御使いを受けしかば、取るものも取りあえず、后町まで参りしに、年は五十路余りの一人の老女が案内して、この所へ誘いてはべりしが」と云わせもあえず、亀菊は柳の眉を逆立てて、

「さて企みたり、こしらえたり。私は其文字（そなた）を呼ばせんとして使いを遣りし事は無し。又、我が使う長女などに年寄りたるは一人も在らず。その使いの名は何と云いつる、老女は何と云う者ぞ」と問い詰られて桜戸は

「否、使いの名は聞きはべらず。老女も何と云う人やらん。その名は知らずはべるかし」と云うに亀菊はあざ笑い、

「実に盗人の猛々しさよ。誰か在るか。此の曲者をさあさあ絡め捕らずや」と激しき下知も權威の一声。その手に従う女武者の采女ら早く聞き付けて承りぬと八九人、群立ちかかって走り来て。有無も云わせず桜戸を手取り足取り押し伏せて押えて縄を掛けてけり。

※万機（ばんき）：政治上の多くの重要な事柄。

その時、亀菊は再び下知して、桜戸が持ちたりし、彼の二品を検めさせるに、鏡はすなわち、高御座の右の柱に掛けられたる月形の御鏡にて、裏には波に兎あり。又、短刀は亀菊が一院より賜りたる浮寝鳥の御剣なれば、

「一方ならぬ盗賊なり」とて彼の二品を差し添えて、罪の趣を書き記させ、時を移さず仕丁（下僕）※をもて検非違使※へ引き渡しけり。

※仕丁（しちょう）：平安時代以降、貴族などに使われ雑役に従事した者。下僕。

※検非違使：平安初期に置かれた、令外の官の一。京中の非違・非法を検察する役。

かくて検非違使の尉※山城之介照道は桜戸を受け取って、事の子細を責め問うに、桜戸は有りし趣を斯様斯様と云い説けども鏡と短刀を売りしと云う女の名所定かならねば、その言い訳は立ち難し。

「なお此の上は夫軟清をも召し捕って詮索すべし」と云われるに、桜戸深く嘆きつつ、

「軟清はこれらの事を始めより少しも知らず、夫婦の間も睦まじからねば、軟清に問わせたまうとも真の事は申しはべらじ。とにもかくにも我が身一つの罪として定めたまえかし」と思い入りて申すにぞ、照道やがて此の由を亀菊に告げしかば亀菊聞いて

「さもあらん、軟清をば捨て置いて、只桜戸のみ詮索せられよ。罪人の多くいで来るは益無き事ぞ」

と答えしかば照道この儀に従い、桜戸の罪を定めしかども今は都の事と云うとも武家の判断に寄らざれば執り行う事容易からず、これによって照道は桜戸の罪の趣を斯様斯様と書き記して六波羅へ引き渡しけり。

※尉（じょう）：律令官制の四等官の一つである判官のうち、衛府・檢非違使の官職に当てる用字。

されば鎌倉より付け置かれし伊賀判官光季は桜戸を引き出ださせて罪の趣を糾明するに、桜戸は彼の鏡の事、短刀の事より、始めて亀菊に呼ばれたる其の事は斯様斯様、又、思わずも岩戸の局に誘なわれたる体たらく、取り次ぎの老女の事は斯様斯様と落ちも無く、つぶさにこれを告げると云えども鏡と短刀を売りしと云う其の女は定かならず、又、取次ぎの老女の事も亀菊がこれを知らずと云えば▼とてもかくても罪は逃れず、なお又、詮索すべけれどて、其のまま牢屋に繋がせ置いて、光季つらつら思案をするに、桜戸が申す趣にさせる証拠は無しと云えどもさながら無実の咎に似たり。

彼の亀菊殿が一院の御寵愛を得たりしより、己に諂う者をば取り立てて、心に逆う者とし云えば罪無くて咎を負わせる。これ今の世の慣わしなれば、了見（熟慮）すべき事なりとて、すなわち罪を定めて曰く、

「桜戸が法を犯して岩戸の局へ入りし事、其の罪軽きにあらねども月形の御鏡と浮寝鳥の短刀をまさしく盗み取りしとも定め難し。いかにとなれば彼女がもし盗みし者ならば、うかうかとして其の所に久しく居る事あるべからず。かかれば盗人に似たる罪と岩戸の局へ迷い入りたるこの二つの咎をもて佐渡の国へ流すべし。これ相当の刑罰に候べし」と聞こえ上げしに、亀菊もこの事は己に理ある儀にもあらぬに、六波羅の判断を押し破らんもさすがにて、又云う由も無かりけり。

これにより光季は又、桜戸を引き出ださせて佐渡の国へ流し遣わす罪の趣を言い渡し、縛めの縄を解き許して、背を二十杖鞭打たせ、さらに首枷を掛けさせて、足高蜘蛛平、戸蔭の土九郎と云う二人の走り使いをもて佐渡の国へぞ送り遣わしける。

さる程に蜘蛛平、土九郎は佐渡の国造本間の太郎へ六波羅より下知せられる送り状を受け取って、まず桜戸を六波羅の門外へ引きださせし折、為楽院の軟清は今日桜戸が佐渡の国へ流される事の由をほのかに伝え聞きしかば、下部錦二を相具して、今朝よりここに待ちて居り、桜戸がいつるを見るより、彼の蜘蛛平、土九郎には一包みづつの銀子を贈ってしばし別れの暇を乞い受け、涙と共に桜戸を辺りの茶店へ誘い入れて、只さめざめと泣きけるが、ようやくに頭をもたげ、「我が妻、およそ御身の無実の罪は誰とて知らぬ者は無けれど、其の言い訳の立ち難きは皆彼の人の故にして、命も既に危うしと聞こえし時は諸共に死なばやとのみ思いしに、なお空蟬（現世）※の息の内にかく面を合わせる事、いと喜ばしと思うにも又、悲しきは会う事を何時と定めぬ生き別れ、今より御身に捨てられて、我が身は何となるべき」と云う声胸に詰まらして、しきりに涙を押し拭えば錦二も臉を擦り赤らめて返らぬ事を繰り返す。鳴の羽根搔、たつ鳥の、別れを共に惜しみけり。桜戸も湧き返る涙に胸は苦しけれど、もとより雄々しき性なれば夫を諫め励まして、

「とてもかくても別れては会う事難き妹と夫（夫婦）※の縁も今日を限りと思うなり。暇（離縁）の状を書きてたべ。しからざれば亀菊殿の心は遂に安からず、私の命が危うかるべし。さあさあ状を書

きたまえ」と云うに軟清は頭をうち振り、

「そは思いがけも無き事を云われるうたてさよ(情けなき)。御身は家の娘にして我は弟子なり、又、婿なり。さるを御身に咎も無く、暇の状をやる由あらんや。この事のみは従い難し」と否むを桜戸押し返し、

「宣う由はさる事ながら、御身と縁を切らざれば亀菊殿の憤りは何時までも執念くて、遂に私は殺されなん。これらの訳を汲み取って、只速やかに去り状をたまうが我が身の為なれば、まげてさあさあ書いてたべ」と云うに軟清、詮方も無く泣く硯を借り寄せて涙と共に磨り流す、妹背の縁も薄墨に書くぞ苦しき三下り半、これ一生の別れとは知るや知らずや白紙も落つる涙に濡れ衣の、無き世をかけし暇乞い、行って帰らぬ水杯も深き嘆きに搔き暮れて思わず時を移しけり。

※空蟬(うつせみ): この世の人。現世。 ※妹背(いもせ): ①夫婦。 ②兄妹。姉弟。

※転し(うたてし): ①嫌だ。感心しない。情けない。②気の毒だ。

されば此の軟清は女子めきたる顔容の玉を欺く美僧なれば、世に白玉の軟清とて手弱女らにさえ知られしかども身の行いは物堅く、胸いと狭き者なりければ、桜戸に別れしより一人くよくよ嘆きつつ、病の床に臥したりと、程経て後にぞ聞こえける。

○これはさて置き、足高蜘蛛平、戸蔭の土九郎は軟清の賄賂を得てければ、▼彼が暇乞いをする其の程は茶店の主人に心得させて桜戸を預け置き、各々宿所へ走り帰って、取り忘れたる物などを携え行かんとする程に、金乃蔓屋と呼ばれたる料理酒屋の男来て、

「誰様なのかは知らねども御身に對面せまほしとて我らが二階にうち上り、先より待ちて居たまえり。土九郎主をも招きくれよ。いずれも暇を取らせはせじ、さあさあと急がせたまえば行く手の序良きままに、戸蔭主へはこれらの事を既に通達仕りぬ」と云うに蜘蛛平は眉をひそめて、

「そは誰なるらん。心得難し。とまれかくまれ自ら行かざれば疑いは解け難かるべし、いざ」とてやがてうち連れ立って金乃蔓屋へ赴けば、其の門辺にて土九郎らも又、招かれて来るに会いぬ。

其の時、互いにしかじかと、立ちながら囁き告げて、其の男に案内をさせて等しく二階へうち上れば、いと奥まりたる座敷の内に齡五十路余りの一人の武士が待ちて居り。元より見知らぬ人なれば二人は進みかねたるを彼の武士が早くこれを見て、

「足高主、戸蔭主、まず此方へ」と座を立て上座へ押し据えける。程しも置かず、下屋より酒肴を持って来つつ、所狭きまで置き並べるを其の武士は蜘蛛平と土九郎らが辺近く差し寄せて「両君、これは寸志なり。まず盃を上げたまえ」と云うに兩人頭を撫でて、

「それがしらは見忘れたるか。君をいずれの人とも覚えず、しかるをかくまで待遇たまうは故こそあらめ」と云いも果てぬに、彼の武士はにっことうち笑み、

「それらの事は只今告げん。まず盃を上げたまえ」とひたすら勧めて止まざれば、蜘蛛平も土九郎も再び問うに及ばずして其のもてなしを受ける程に、其の武士は懐ろより、二包みの金を出し、又、兩人の辺に差し置き、

「各々これを受納したまえ」と云いつつ声を潜まして、

「数ならねども、それがしは亀菊殿の雑掌にて富安舳太夫と呼ばれる者なり。此の度各々の送り行

かれる桜戸の事に付いて密義あり。彼の女は我が主君の深き恨みある者なり。これにより、道中にて桜戸をうち殺し、其の証拠として彼の者の面の皮を削ぎ取って実見に入れたまえば、なお幾何も褒美あらん。彼の桜戸は左の方の頤（下あご）に黒子あり。それを証拠の為なれば、面の皮を削ぎ取って御目にかければ各々に偽りの無き程は知られん。さあさあこれを収めたまえ」と欲より誘う二包みの金をしきりにすすめけり。

傾城水滸伝 第二編ノ四 曲亭馬琴著 歌川国安画

其の時、土九郎は頭を振って、
「否、其の事は叶うべからず。六波羅殿より桜戸を佐渡へ送り届けよと、仰せつけられたりけるに、道にて殺して事顕れれば、これ我々の難儀にならん」と云うを蜘蛛平は聞きながら、
「戸蔭、さりとは飲み込み悪し。道中にて人知れず、桜戸をうち殺し、病死と云い立て帰り参らば誰が真とせざるべき」と云うに舂太夫喜んで、
「足高主、いさぎよし。万事、手違い無きように何分頼み参らす」と云いつつ贈る二包みの金を兩人受け納め、
「富安主、心安かれ。遠からず吉相を告げ申さん」とひそめき囁き、又、盃を巡らして思わず時移りしかば、舂太夫は手を打ち鳴らし、以前の男を呼び寄せて、酒肴の値を取らせ、三人ひとしく座を立ちつ、門辺に出て舂太夫は蜘蛛平、土九郎らに引き別れ、己が宿所へ帰りけり。

○かくて蜘蛛平、土九郎らは元の茶店に赴いて、桜戸を急がしつ、追っ立て追っ立て近江路より北国指して旅立ちけり。

されば軟清、錦二らは逢坂の関の此方まで、見え隠れに送り行きしが、さてあるべきにあらざれば泣く泣く家路に帰りけり。

さる程に蜘蛛平らは其の日は僅かに三四里にして坂本の在家に宿を取り、明けの朝は未きに発つて、しきりに道を急げども、桜戸は背中を打たれし鞭の傷に痛み出て、行き悩みつつ進みかねるを蜘蛛平、土九郎らが或るいは罵り、或るいは嘲り、口に小言は絶えねども、桜戸は露ばかりも彼らに逆う事を云わず、心ばかりは急げどもとにかく道が捗らず、この日は七里ばかりにして、とある里にぞ宿りける。

此の時までは定まりたる旅籠屋は稀にして、旅人を宿するものの風呂を焚く事も無く、多くは木賃のみなれど、流人を送る公人には旅籠賃を取る事無く、又、饗応もせざりしかば、蜘蛛平らは荷を解き下ろして一つ座敷に疲れを休め、煮え湯を盥に汲み入れさせて竹縁の元に差し置いて、さて桜戸を呼び起こし、「洗足を使え」と云う。

桜戸は疲れ果てたれば、首枷を掛けられたる其のままに倒れ伏して、息もせで居たりしに、蜘蛛平らが情けらしくしか云うを打ち聞いて、

「そはかたじけ無くはべれども、私はひどく疲れし上に首枷が邪魔なれば、足を洗うも自由ならず。

只このままにて眠るべし」と云うを蜘蛛平は聞きながら、

「しからは我が洗って得させん、さあさあここへいでたまえ」と云うを桜戸押し返し、

「それは余にはばかりなり。只打ち捨てて置きたまえ」と否むを蜘蛛平聞きながら、

「それは益無き遠慮ぞかし、▼旅は路連れ世は情け、何かは苦しかるべき。さあ来て洗いたまえかし」と、しきりに云うて止まざれば桜戸は遂に否みかね、其の謀り事あるをも知らず、「しからは許してたまえかし」と云いつつ、ようやく甍り出て、竹縁に尻を掛ければ蜘蛛平は下に居り、「さらば洗って得させん」と云うより早く、桜戸の足を掴んで煮え湯の中へ、たちまちどぶりと押し入れれば桜戸は「あっ」と叫んで、矢庭に足を引いたれども既に両足ながら湯膨れに腫れ上がり、其の痛み耐え難ければ元の所へ居坐行き、再び倒れ伏してけり。

蜘蛛平はこれを見て

「負ぶうをと云えば抱かると云う、我は仏心で足を洗うてやるさえあるに、熱いぬるの温いへくさの屁臭いのと、様々の望み小望はあろう事か、あるまい事か。昔よりして流人どもが役人様の肩を揉み足を洗う事はあれども、役人様の流人の足を洗ってやったためしは無きに、慈悲も情けも得知らぬ奴に構うは損じゃ」と罵れば、土九郎らもがやがやと共に罵り辱めて、さてこの二人は其の煮え湯に良き程に水を挿し、互い代わりに足の泥を注ぎ落とし、臥所に入りて、其の宵の間より眠りけり。

かくて其のそ 曉あかつきに蜘蛛平、土九郎らは密かに起きて朝飯を食らいし時に、桜戸はやや目を覚まして慌てふためき起きいでしかども早や其の膳が過ぎたれば、今更食べる事も得ならず、その時、蜘蛛平は新しき草鞋を出して桜戸に履けと云う。桜戸は火傷痛めば、古き草鞋を履かんとて、置きたる所を尋ねるに、隠されたのか捨てられたのか、そこらあたりに無かりしかば止む事を得ず、新しき草鞋を履いてぞ発ち出ける。

この時、文月(7月)下旬にて残る暑さの耐え難きに桜戸は湯膨れを新しき草鞋にて擦り壊したりければ、痛みいよいよ耐え難く、ややもすれば立ち止まるを蜘蛛平、土九郎らは追っ立て追っ立て、罵り責めて止まざるを桜戸は侘び悲しんで、道歩行かぬを苛立って、

「叱りたまは無理ならねども私わらわは実に足痛んで速やかには走り難し。願うは少し思いやり、静かに歩かせたまえかし」と云うに兩人嘲笑い、「然程に足の痛むのならば我々の肩にかかれ。世話な奴」だと蜘蛛平は肩を差し寄せ、手を掛けさせて、土九郎は後ろより桜戸の腰を押しつつ、道十四五町行く程に、里遠ざかる長枝原の辺まで来る時、有明の月鮮やかにて、その宵未だ明けざりけり。

その時、蜘蛛平、土九郎らは松の株くいせに尻掛けて、余りに早く出でたので薄眠たくなりけり。

「桜戸も休み候え。いざ、ちとばかり微睡おべし」とて道中の用心に都より携え来たる五尺余りの檜の棒を各々手近く引き付け置いて眠らんとしたりしが、兩人ひとしく眼を開き、しきりに辺りを見返るを桜戸これを訝って「各々は何故に微睡まず御座するや」と問えば兩人

「然ればとよ、眠りたくは思えども和女そなたが逃げて走らんかと思えば、なかなか眠られず」と云うを桜戸聞きながら、

「いかでかざる事はべるべき。心置きなく眠りたまえ」と云うに兩人頭こうべをうち振り、

「いやいやどうでも眠られず。御身を縛って置くならば眠られる事もあるべきに」と云うは予ねての悪企み、とは知らずして桜戸は

「それ程にまで思いたまえば、ともかくも計らいたまえ。しばしの程の事なれば」と云うに兩人密か

に喜び、

「しからばしばらく縄を掛け、繋ぎ置いてまどろまん。もしも覚めずば良き程に起こしたまえ」と云いつつも腰に付けたる捕り縄をもて、桜戸の手も足も動かぬ様に縛めて、方辺の松に絡み付け、兩人棒をおっ取りて左右ひとしく立ち向かい、

「これ、我々の心に非ず。道にて汝を密かに殺せと、亀菊殿の仰せを受けて止む事を得ず、かくの如し。明年の今月今日はこれ汝の命日なれば、花を手向けて香を焚き、その亡き後を弔わん。逃れぬ命と諦めて、念仏申せ」と罵れば、桜戸驚き、打ち嘆いて、

「やよ、待ちたまえ、云う事あり。私は元より各々方と、させる恨みがあるにもあらず。助け難きを助けるこそ慈悲とも云わめ、功德にもならん。後世の報いを思いやり、今の命を助けたまえれば必ず恩義を返すべし」と云わせも果てず、兩人は眼を怒らし声振り立てて、

「この期に及んで、無益の繰言。観念せよ」と取り直す棒をひらりと振り上げて、桜戸の眉間をのぞんで打たんとしたる程しもあらず、たちまち松の▼木陰より、現れ出でたる大比丘尼。「おっ」とおめいて（叫んで）鉄の杖持ち、発止と打ち払えば、蜘蛛平も土九郎も持ったる棒を七八間、等しくからりと跳ね飛ばされてこれはと驚き見返れば、桜戸も眼を開いて見れば見知れる花殻の妙達がここへ来て我が身の必死を救いしなり。その時、妙達は眼を見張り、蜘蛛平らをはつたと睨まえ、「此の盗人ども、欲に迷って人を殺さん企みより、おのれの首を用心しろ。いで、この杖を食らわせん。おのれらの棒より食いではあるぞ」と罵って、彼の鹿杖を振り上げるを桜戸急に押し止めて、「尼御前、しばらく怒りを収めて、私が云う事を聞きたまえ。此の兩人は始めより私を殺す心無し。只、亀菊にしかじかと云い付けられし事なれば、いかでか違背せらるべき。さるを彼らを殺したまえば、これも又無実の罪なり。まげて彼らを許したまえ」と云うに蜘蛛平、土九郎はいささか生きたる心地して二人ひとしく額を突き※、

「只今、桜戸殿の云われし如く、亀菊殿の云い付けなれば止む事を得ず、此の婦人を害せんと致せし事、今更後悔つかまつりぬ。南無尼君活仏大菩薩、この後は露ばかりも桜戸殿を粗略無く労わって送り行くべきに。命を助けたまえかし」と大地にひれ伏し、手を合わせ、異口同音に詫びしかば、妙達は僅かに怒りを収めて、まず戒刀を引き抜きつつ、桜戸の縛めの縄を手早く切り捨て、芝生の辺にいたわり居らせ、

「姉御よ。我が今、ここに来たのをさぞ訝しく思われん。先に御身の無実の罪の事の様子は聞きしかど、救う手段の無きままに気を飲み揉んで日を送りしが、御身が佐渡へ流されたまうと聞こえしに、その日に会わんと六波羅の門前まで行きしかど、掛け違え、遂に会う事を得ざりき。しかるにその日一人の武士がこの蜘蛛平、土九郎らを金乃蔓屋へ招き寄せ、密談数刻に及びし由を告げる者があるにより、もし亀菊が忍びやかに此奴らを語らわせて、御身を害する事もやと早くも心付きしかば、我もその日に発足して見え隠れに付けて来て、一つ所に宿取りて、密かに様子をうかがいしに、様々の悪巧み。煮え湯をもって火傷をさせ、又、新しき草鞋を履かせて、その湯膨れを擦り壊させ、今朝は未きにここに至って御身を欺き縛り置き、うち殺さんとしつるまで、我ことごとくこれを知りぬ。御身の詫び事ならざりせば、二人ながら押し並べ、脳も骨も打ち砕き、此の腹立ちを治さんに」と云うに桜戸は志の浅からぬを喜び聞こえて、

「只今も、宥めし如く、彼らを殺したまう時は返って私の為ならず、許されしこそ喜びなれ。さても御身はこれよりして又、何処へか行きたまうか」と問えば妙達微笑んで、

「人を殺せば血を見るべし。人を救えば終わりを見るべし。我は御身に付き添って配所まで送り届けん。此の痴れ者※ども。桜戸殿を背負いなりとも手を引くともして、ずいぶんと勞わり助けて、我に続いて、さあさあ来よ」と云いつつ、やがて先に立ち、五七町行く程にその村の取り付き※に一軒の酒屋がありしかば、妙達はそこに立ち寄り、うどんを打たせて桜戸に食わせ、酒をも飲ませ我が身も飲んで、蜘蛛平、土九郎にも振る舞いければ、その兩人は言葉を揃えて、

「尼君は都にて何れの寺に御座するにや」と問えば妙達あざ笑い、

「この痴れ者ら、我が名所をよく聞き置いて亀菊に告げ知らせんと計るよな。人は亀菊を恐れるとも我は彼奴を何とも思わず。無益の口を叩かずに桜戸殿をよく勞われ。いざ行くべし」と発ちいでけり。

これより蜘蛛平、土九郎は妙達に責め罵られ、彼女の下部に異ならず、走るにも止まるにもいささかも自由を得ざれども、その意に逆えば討たれん事を▼恐れて、日々に妙達の機嫌を取らずと云う事無く、とかくして居坐車を求めいざりぐるまを求めいでして桜戸を乗せ、兩人代わる代わるにこれを引きつつ行く程に、ある日片方に人無き折、蜘蛛平、土九郎が談合する様、

「我々、仕合せ悪くして、亀菊殿に頼まれたる一大事を仕損じたれば都へ帰って言い訳無し。さていかにせん」と語らうに蜘蛛平しばらく思案して、

「近頃、深草の成仏寺に畑守りの比丘尼あり。万夫不当の荒者にて、その名を妙達とか云うと聞きぬ。察する所、彼の比丘尼めは成仏寺の妙達なるべし。我々、都へ立ち帰れば、彼の妙達に妨げられて手を下すことを得ず、その故は斯様斯様と、ありのままに告げ申して、亀菊殿よりたまわりし金をそのまま返すべし。これより他に詮方あらじ」と云うに土九郎頷いて、

「我もさこそは思いしなれ、此の事尤もしかるべし」と相談を極めつつ、なお妙達に送られて夜に宿り日に歩み、行き行きて越後の寺泊まで来たりけり。

※額突く（ぬかずく）：ひたいを地につけて拝礼する。丁寧にお辞儀をする。

※痴れ者（しれもの）：①愚かな者。ばか者。②手に負えない者。乱暴なもてあまし者。

※取り付き：①物事のはじめ。とっかかり。②道などが始まる場所。とばくち。とっつき。③人から受ける最初の印象。

その時、妙達は桜戸にうち向かい、

「姉御、ここにて別れはべらん。これより先は船路にて、向かいへ渡れば佐渡なれば道にて気使い無かるべし」と云うに桜戸うやうやしく、

「思い掛け無き情けによって、かく恙無く来る事、いつの時に忘ればべらん。帰りたまえば、我が夫にも錦二らにもしかじかと、よく言い付けてたまえかし」と云うに妙達頷いて又、蜘蛛平らにうち向かい、

「痴れ者ども、此の後とても桜戸殿をいたわって、陰日向無く心を付けよ」と云うに二人は小膝を付いて、

「いかでか仰せに背くべき。さあさあ帰りたまえ」と云うに妙達「さこそ」とあざ笑い、片辺の丘の年旧りたるいと大きな松を指差し、

「いかに二人の痴れ者共。汝らの頭の鉢とあの松の木と、いずれが固い」と問うを兩人聞きながら、

「そは宣うまでもあらず。我々の一身五体は親の産みたる肉身なるに、その堅き事いかにして、あ

の松などに及ぶべき」と云うを聞きつつ妙達は松の^{ほどり}辺に歩み寄り、彼の^か鉄の^{くろがね}鹿杖^{かせつえ}※を取り直し、矢声を掛けて幹のただ中、発止と打てば、一抱えにも余るべき松は半ばより打ち折られ、高き木末は逆様に大地を打ってぞ倒れける。

※鹿杖（かせつえ）：先が二股もしくは丁字になった杖

蜘蛛平、土九郎これを見て、^{こうべ}頭を抱え舌を吐き、驚き呆れて呆然たり。妙達は悠々と丘より下りて杖^{つえ}を突き立て、
「痴れ者ども、手並みは見つらん。もし^{かりそ}仮初めにも^{むご}桜戸殿を^{なんじ}惨くもてなす事あれば、^{すこうべ}汝らの素頭もこの松の如くなるべし。我が云う事を忘れるな」とあくまでに^{いまし}戒めて、さて桜戸に別れを告げ、元の道へぞ帰りける。

かくて蜘蛛平、土九郎らは寺泊に宿取って、順風を待つ程に、今宵より妙達に^{ののし}責め罵られる事も無ければ^{わず}僅かに自由を得たりしが、桜戸にうち向かい、
「さて、あの御比丘尼は思うに増したる力なり。あの大木を一と打ちに打ち折りし^{てい}体たらくは人間技とは思われず、^げ実に^{ひどかか}凄まじき女かな」と舌を振るって恐れしかば桜戸聞いて笑いつつ、
「あればかりの事はものかわ。いつぞやは寺にて一抱えに余れる柳を只一^{ひどかか}抜きに根こぎにしたる事もあり」と云うに二人は益々恐れて、
「我々運命尽きずして、危うき命を拾いしや」とて噂のみして止まざりけり。

○かくてその明けの朝、^{おいて}追風良しとして船に乗りしに、海上さらに^{つつが}恙も無く、その日未の半ばには早や^{おぎ}小木の港に着きぬ。▼この所より^{こくふ}国府へは三四里に過ぎずと云えば、桜戸^{みたり}三人は港の酒屋に尻うち掛けて、さあさ酒をいだせと云うに^{あるじ}挨拶だにせざりしかば、桜戸は主人を呼び寄せ、
「先より酒をいだせと云うに、などで答えもせざるやらん」と云うに^{あるじ}主人は進み寄り、
「客人たち、腹立ちたまうな。御身に酒を売らざるはそれがしが^{すんし}寸志なり。今だ知らで御座するやらん。そもそも此の里には^{おりたき}折瀧の^{ふししば}節柴^じ刀^じと^{とな}称え申す^{れされき}歴々の^{こうしつ}後室あり。これはこれ平家の一門^{いけ}、池の大納言^{だいなごん}頼盛^{よりもり}卿の^{ちゅうじょう}孫娘、^{さいしやう}中^{よりもり}将^{よりとも}宰相^{よりもり}頼貞^{よりとも}朝臣の息女なり。昔、源平の戦いに頼盛^{よりもり}卿は頼朝公に深き恩義があるをもて、独り都に留まりたまひ、平家は滅び失せし後、^{よりもり}頼盛公をば鎌倉より様々にもてなされて、^{かんいしやうえん}官位^み庄園^{こより}元の如く^{あそん}当て行われたりけるに、その御子^{よりもり}頼貞^{よりとも}朝臣の世に至り、院の御気色をこうむりたまひて、この国へ流されたたまひしが、なおも鎌倉より取り成したまえば、^{しゃめん}赦免^{ごさ}の御沙汰ありしかども^{よりさだ}頼貞^{じたい}いかなる所存かありけん、^{よりさだ}辞退して^{にわ}歸りたまわず。その年に頼貞は俄かに身罷りたまひしなり。後には^{ひめうえ}姫上^{どうじやうがた}一人あり、予ねて都の堂上方^{公卿衆}（公卿衆）を婿がね^{候補}（候補）の聞こえありしが、その婿君も都にて若死にをしたまひければ、^{ひめうえ}姫上は許嫁の婿君の為に^{いいなづけ}髻^{むこぎみ}を切つて^{たぶさ}再び男に見えたまわず。又、都へも上りたまわで、この地に御座しますにより、鎌倉より一万町の庄園を付けられて^{えいたいあんど}永代安堵の御教書を^{みぎやうしよ}なし置かれる由あれば、その家最も豊かにて^{けらい}家来^{けんぞく}、眷属はなはだ多かり。この^{こうしつ}後室の居たまう所を^{おりたき}折瀧の庄と云い、その名を^{ふししば}節柴殿と申すなり。しかるに、その^{ふししば}節柴殿は慈悲、情けある婦人にて「この国へ、^{るにん}流される^{おんみ}流人が来たらば、早く知らせよ。酒を飲ませ物を取らせて^{ほどこ}施しをすべきなり」と予ねて^{のたま}宣う由のあるに、^{おんみ}御身^かここにて酒を飲み、顔を赤くして彼の屋敷へ尋ね行けば、^{るやう}路用ありと思われて物をば施したまうまじ。我ら此の儀を思うにより、わざと酒を売らぬ

なり」と云うに桜戸深く感じて、主人の情けを喜び聞こえ、蜘蛛平、土九郎を見返って、
「只今、聞せたまうが如し。いかにその御屋敷へ立ち寄って見たまわずや」と云えば兩人小首を傾け、かかる人を尋ね行かば、いずれの道にも損はあらじと、思えば等しく頷いて、
「そはともかくも」と答えしかば、桜戸は節柴の屋敷を何処と尋ねるに、主人はつぶさに説き示して、
「ここよりは十町ばかりの大きな石橋を渡りたまえば、その所より折瀧屋敷に候」と懇ろに教えしかば、桜戸は酒屋の主人に喜びを述べ、立ち出て、蜘蛛平、土九郎諸共にその屋敷へ赴く程に、果たして大きな石橋ありて向かいに一構えの屋敷見えけり。

その広く広々たる所に稀なる棟木造りが目ざましくて鄙(田舎)ならず。ここぞと思えば桜戸は潜り門に立ち寄って門番に打ち向い、

「私事は都の流人桜戸と云う者なり。此の由を主の君に聞こえ上げてたまわれかし」と頼めば門番つらつら見て、

「和女郎(おぬし)は幸い無き者なり。後室様は今朝未きより茸狩りの為にとて東の荘へ行かせたまひぬ。御留守なれば詮方無し」と云うに桜戸は本意無くて、

「しからば又、何時ごろに帰せたまうべきやらん」と再び問えば、
「然ればとよ。初茸を採らんとて下屋敷へ御いでなれば、今宵は彼処にお泊りなされて二日も三日も逗留あらんか。その程は計り難し」と云うに桜戸うち案じて、

「しからんには宣う如く、私は実に幸いなし。いざ罷らん※」と云いかけて又、蜘蛛平ら諸共に元來し道へ帰れどもここに来ながらたちまちに望みを失う事なれば、さすがに足が渉らず、又、石橋まで来る折から、と見れば左手の大路より一挺の忍び乗り物を六尺四人にかかせつつ、従う男女の供人は幾十人とも数え尽くさず、獲物の早松※初茸などを青籠に入れ、釣台にかき担わせ、陸續(続々)として帰り来ぬるはこれ必ず▼折瀧の後室ならんと推したる。

※罷らん：貴人の前や貴所から退くこと。退出。 ※早松茸(さまつたけ)：7月ごろに出る早生の松茸

桜戸は嬉しくて道の片方に佇みつつ、うち眺めて居る程に、その乗り物の内よりも桜戸を早く見て、
「あれは流人と覚ゆるぞ。其の名所を尋ねよ」と云うに若党は心得て、桜戸の辺へ駆け抜けて、さてしかじかと尋ねれば桜戸も小腰をかがめて、

「これは都の流人にて桜戸と云う女子なり。只今、御屋敷へ訪ね参りしかど、御遊山の由なれば、本意無くもすござと立ち帰らんとせし折なり」と云う声洩れて聞こえけん。節柴は乗り物をかき据えさせて忙わしく立ちいでつつ、その辺へ進み近づいて、

「桜戸殿と名乗りたまうは先に女武者所の采女にて武芸の師範になされたる元の為楽院の息女と聞こえし、彼の虎尾の桜戸殿か。それかあらぬか、いかに」と問うを桜戸答えて、

「私こそはその虎尾の桜戸なれ」と云うに節柴は喜んで、
「その名は予ねて聞きながら、会う由無しと思ひしに縁あればこそ因らずも面を合わせる嬉しさよ。いざ此方へ」と手を取って、そのまま屋敷へ伴いつつ、客座敷へ傳き入れ、様々いたわり慰めたるその隙に腰元共が酒肴を持って来れば、又、三四人の女どもは白米一斗と錢五貫文を台に載せて、うやうやしく持て来るのを節柴はうち見て、

「そは何事ぞ。この御方にさばかりの物を参らせる事やはある。酒も肴も引き替えて良くして出だせ」と息巻けば桜戸これを押し止めて、

「私にたまう物ならば、あれにても過ぎはべらん」と云うを節柴聞きながら、
「否、女子どもが思い違えて御身を世の常の流人と見たる愚かさよ。そこらに心を使いたまうな。皆引き替えて持て来ずや」と云うに皆々心を得て、膳料理も世の常ならぬを俄かに仕替えて持ていだせば、節柴は桜戸を上座に押し据えて、蜘蛛平、土九郎をもその次に居並ばせ、自ら盃をすすめ肴をはさみて、いと懇ろにもてなす折から一人の腰元がしとやかに節柴の辺へ来て、

「お師匠様が来たまいぬ。此方へ通し申さんや」と告げて指図を窺いけり。

節柴これを打ち聞いて、

「そは幸いの折からなり。此方へ誘い参らせよ」と云うに腰元は心得て、表の方へ急ぎ行きぬ。桜戸は今、取次ぎの女子が師匠と云いつるはもしや主人の武芸の師匠か、さらば遊芸を教える者かと思いつつ、なお問いかねて打ち守り居る程に、齢は四十ばかりにして肥え太りたる荒女が座席を蹴立てて入り来れば、桜戸はこれぞ彼の師匠と云われる者ならん、と思えばやがて座を立て、頭を下げて迎えれどもその女は会釈もせず、その座を奪って上座に押し直り、節柴に挨拶をする体たらく、片方に人の無き如し。その時節柴は桜戸を指さして、

「綾梭の刀自。此の女中は先つ頃、都にて女武者所の師範たりし、虎尾の桜戸殿なり。彼の亀菊に憎まれて無実の罪に落とし入れられ、此の国へ流されたまいぬ。いと痛ましき事ならずや」と云いつつ桜戸を見返って、

「虎尾の刀自。この女中も先に亀菊に憎まれて、遂に都を逐電せられし、彼の綾梭の刀自なる由。近頃ここに来たまいぬ。予て知る人ならずや」と引き合わせれば、桜戸はその女をつらつら見て、
「私が采女ではべりし時、綾梭殿をばよく知れり。名は同じくはべれどもこの女中はその人ならず」と云われて、その綾梭は気色変わって、火の如く赤らむ顔につぶらなる目を光らして桜戸をしばし睨まえたりけるが、からからとあざ笑い、

「折瀧殿は何故にかかる流人をもてなしたまうぞ。真に虎尾の桜戸ならば私を見知らぬ事やはあるか。さるを返って私が事を都の綾梭ならずと云うは只これその身の化けの皮を現されんと思えばなり。かくてもなお疑いたまえば、此の所にて試合をして、いずれが真か偽りか、勝負によって疑心を晴らさん。馬鹿馬鹿しや」と息巻きけり。

節柴は此の綾梭を予ねて疑う由あるに、今桜戸を嘲って、しかも傍若無人なるを片腹痛く思ひしかば、これ幸いの事としつつ、今桜戸に討ち倒させなければ彼女が真の綾梭ならぬを確かに知る由無からずやと、思案をしつつ頷いて又、桜戸に打ち向かい、

「近頃、御大儀なるべけれど、綾梭殿と試合をして一興を添えたまえかし。只今も云いつる如く、此の女中は近き頃、此の国へ渡り来て武芸の指南をしたまう故に人押し並べて師匠様と称えはべれど、私の為に師弟の因縁があるには非ず。必ず遠慮したまうな」と心有り氣に説き示せば、偽綾梭は節柴が桜戸を鼻肩して、我を狭みする詞の端々、たちまち腹に据えかねて、

「それは真に面白し。さあさあ勝負を決せん」と苛立って早や立ち上がれば、節柴は腰元にしかじかと云いつくるに、六尺ばかりの寄棒を二筋持て来て、縁側の辺へ徐ら差し置きけり。

その時、綾梭は▼裳裾をかかげて、その棒を取るより早く庭へひらりと飛び降りて、

「その桜戸の紛れ者。さあ来て勝負を決せよ」と手招きをして立ちたりける。

桜戸は今更引くに引かれぬ主の懇望。此の綾梭は節柴の師匠ならぬを知りければ、
「しからは相手になりはべらん。許したまえ」と座を立て、その棒かい取り、庭へひらりと立ち
いづるに、この時、日は暮れ月出でて、さながら昼に異ならず。

さる程に偽綾梭は旗雲と云う棒の手を十分に使いだして、「来たれ、来たれ」と呼ばはれば、
桜戸はしづしづと構えの内へ立ち向かい、水の月と云う手をもて打ち合う事しばしにして、何思い
けん桜戸は構えの外へ退き出でて、

「私は負けてはべり」と云う。

節柴は本意なくて、

「未だ勝負も見えざるに、などて負けたと云われるぞ」と訝り問えば桜戸答えて、

「私は首枷を掛けてはべれば、身の働きが自由ならず。故に負けと云いしなり」と云うに節柴微笑
んで、「実に、さもあらん。その所へは私も心付かざりき」と云いつつ、やがて腰元に十両の銀を
取り寄せて二つに分けて押し包ませ。これを蜘蛛平、土九郎に贈って云う様、

「願うはしばし試合の内、桜戸殿の首枷を取り除きたまえかし。もし国府にて沙汰あれば私宜しく
云い説きはべらん。受けひきたまえ」と請い求めれば、蜘蛛平、土九郎は一議に及ばず、その金を
受け納め、彼の首枷を外しけり。

その時又、節柴は二十五両の沙金を出して、いずれにも勝ちたる方へ引き出物にせんと云う、此は
桜戸を励まして勝たせんと思えばなり。さる程に偽綾梭は桜戸が退きしは我を恐れる故なりと思ひ
誇ってその金を取らばやとのみ逸りしかば、再び棒を水車の如く回しつつ、「来たれ、来たれ」と
呼ばはれば、桜戸もやや身軽くなって再び棒をかい込んで構えの内へ進み入り、互いにやと声を
掛け、しばらく挑み戦いしが、桜戸はたじたじと後退りをする程に、綾梭得たりと勢い込んで、討
たんと進むを桜戸は引き外して閃かす、その棒、稲妻の如くなれば、偽綾梭は目眩いて、急に避け
んとする所を桜戸棒を引くよと見えしが、偽綾梭が向脛を発止と難て返す手に、又、空ざまに跳ね
上げれば偽綾梭は「あっ」と叫んで、翻筋斗打ってだうと伏し、持つたる棒は遙かに飛んで、池の
中へぞ落ちたるける。

その事の体たらく、誰かは興に入らざん、「ああ」と等しく褒める声、しばしは鳴りも止まざり
けり。

偽綾梭はひどく負けて、しばしもたまらず逃げ失せしが、その後この地に居る事叶わず、次の日
逐電したりしとぞ。彼女は人寄せの友代の弟子にて赤尾と云える者なるが、綾梭の名を偽って国々
を巡る者なりと後にぞ人皆知りてける。

されば又、節柴は桜戸の武芸を深く感心して、且つ喜ぶ事大方ならず、これより日毎にもてなし
て何くれとなく語らい暮らすに、早や四五日を経たりしかば蜘蛛平、土九郎は国府へ日限遅れんと
て、しきりに催促してければ、節柴も留めかね、桜戸には先の沙金(砂金)二十五両に又、一貫目の
銀子を贈り、流人預かりの四伝次らに頼みの状を書いて渡し、

「寒けくならば、冬の衣装を配所へ贈り遣わすべし」と云うに桜戸涙を浮かべて、その志の浅から
ぬ喜びを述べしかば、節柴は又、沙金五両づつを蜘蛛平、土九郎に与えるに、兩人深く喜んで、又、

桜戸に首枷を元の如くに掛けさせて宰領してぞ立ちいでける。

○かくて蜘蛛平、土九郎は佐渡の国府に赴いて、六波羅よりの送り状を本間の家臣に渡しつつ、流人桜戸を送り来る事の由を述べしかば、本間の太郎はこれを聞き、家臣に桜戸を受け取らせ、やがて六波羅の請文を認めて蜘蛛平らに渡すにぞ、その二人の宰領は都を指して帰りけり。

○さる程に桜戸は流人小屋へ追い入られて、その体たらくを初めて見るに、男の流人と女の流人はその居る所は同じからねど、ある日は山麻を刈り、薪を取り、炭を焼く営みのいずれも苦しげならぬは無し。されば女流人らは桜戸を哀れんで、

「御身は未だ知らざるべし。およそ流人の預かりは国造の家の子(家臣)で剣山四伝次と云う人なり。此の小屋の惣頭は生き剥ぎの奈落婆とていと恐ろしき女ぞかし。まず此の二人に物を贈って哀れみを願わざればいと酷き目にあう。なれば、そこらに心を付けたまえ」と囁き教える程しもあれ、奈落婆は見廻って桜戸に打ち向かい、

「新米の流され者、桜戸とは汝よな。などで早く三拜して頭を土に掘り込まざる。おのれが面の幽霊めいたる、都にて様々の悪事をなせし咎により、流されしこそ道理なれ、汐風が身に染むまで、生けみ殺しみ責め使わん。覚悟をせよ」と罵れば辺りにいたる流人どもは恐れて皆々出て行きけり。その時、桜戸は沙金三両を取り出して、

「お婆様、これは余りに少しながら受け納めたまえかし」と云いつつ懐へ差し入れれば、奈落は重みを引いて見て、「これは私と四伝次殿に贈る物か」と尋ねれば桜戸答えて、

「その金は御身一人にはべるべし。四伝次様には又、別に三両を参らせん。これを届けてたまわれかし」と云いつつ金を又、取り出して、折瀧屋敷をいずる時、節柴が書いて渡せし書状と共に渡せしかば、奈落はからからと笑いつつ、

「桜戸殿、御身は良き女子ぞかし。彼の亀印に憎まれて無実の罪に沈みたまえど、遠からずして帰洛あるべし。事に折瀧殿よりもこれらの手紙を添えられたれば、いかでか如才に思うべき。まずまず休息あるべし」とて、そのままに走り去り、彼の四伝次に由を告げれば、四伝次はうち笑みつつ領いて、奈落と共に小屋へ来て、桜戸を呼び出して、

「およそ初めて来る流人は脅しの棒とて二十杖、背中を打つのが定法なれども、汝は病ある由なれば、しばらく用捨すべきなり。今より地藏堂を守るべし」とて堂守にぞしたりける。かくて又、桜戸は奈落に五両の銀子を贈って、

「願わくば、この首枷を取りてたまわれ」と頼みしかば、又、四伝次に取り成して、その首枷を取り除かせて大方ならず勞わりけり。

▼地獄の沙汰も金次第、世の諺を今ぞ知る。桜戸は次の日より地藏堂の守りとなって彼処に住処する程に、その身の勤めとする由は只、香を焚き、花を折り替え、そこらを掃除するのみなれば、流人どもは驚くまでに、かかる役義は今参り(新参)の絶えて得難き事なりとて、知るも知らぬも羨みけり。

かかりし程に桜戸は首枷すらも取り除かれて、その身の自由を得たりしに、常に暇あるをもて、

折々そぞ漫ろ歩きをし、里の町々を見物せしに、ある日、思い掛けなくも、真介ますけと云える者に会いけり。彼は桜戸の父、剛詮ごうせんが世に在りし時、召使わかとううたる若党わかめなりしに、若き者の習いとて都の遊び女めに身を持ち崩し、その身の衣類ぎつぐ雑具は更なり。主の剛詮ごうせんの秘蔵ひぞうの経文きやうもんを密かに質ひそに入れしかば、その事遂に顕れて、剛詮ごうせんの怒り甚だしく、公おおやけへ訴え申して罪を正さんと息巻ふびんきしを桜戸は不憚ふびんに思つて親の怒りを宥なだめつつ、真介ますけには金かを与えて彼の経文きやうもんを受け戻させ、ようやく無事に収めしかども剛詮ごうせんはなお彼を憎んで、身の暇いとまを使わしけり。

その時も桜戸はちとの路用ろようを取らせなどして、向後こうごを戒いましめたりければ、真介ますけは慚愧ざんき後悔ぜひして、是非無く都を立ち去りしが、その後あちこちとさ迷いつつ、遂にこの地へ漂泊し、真琴屋まことやと云う料理酒屋に奉公せしに、元より料理心もあって、よく客をもてなしければ、その店いよいよ繁盛しけり。これにより、真琴屋まことやは深く愛で喜んで、真介ますけを己が婿おのとしつ、只一人娘こじつの小実めあと云えるを妻合めあはわせしに、幾程も無く真琴屋まことやは遂に身罷りたりしかば、真介ますけは店を受け継いで夫婦おむむきひとしく稼かようぐ程に、この日は掛を取らんとて、佐和田さわたの町をうち巡りつつ、思い掛けなく大恩だいおんある故主こしゆの娘おむむきに会いしかば、此はそもいかにと驚いて事の由を尋ねるに、桜戸は無実の罪にて流され来る事の趣おもむきを斯様かよう斯様と物語れば、真介ますけはしきりに涙を流して、その不仕合せを哀れみ慰め、我が身の上を物語りして、やがて宿所しゆくしょへ伴つて妻の小実こじつに由を告げ、酒をすすめ、膳をすすめ、夫婦おむむきひとしくもてなすにぞ。桜戸も昔を忘れぬ彼が志を喜んで、なおも詳しく我が身の上、亀菊の事をさえ、始め終わりを物語り、

「私わらわは流人るにんの事なるに斯様に親しくもてなされれば、和殿わどの夫婦を巻き添えせん」と云うに真介ますけは聞きながら、

「いかでか、さること候べき。昔の御恩ごおんの方が一つも返し参まいらせんはこの時なり。何事なにごとまれ受けたまわらん。そそぎ洗いの事なども配所はいしょにては不便ふびんなるべし。汚れし物のあるならば、お(よ)こして小実こじつに洗せんわせたまえ。我々はこの地にて抄しかばかしき親類無ければ、心細く候いしに、囚けんさんらずも恩人おんじんの見参けんさんに入りし事、喜びこれに増すこと無し」とて、なお様々にもてなしけり。

これよりして真介ますけ夫婦は日毎に桜戸を問い訪れて、飯の菜さいの物などを贈りしかば、余の女流人るにんらも桜戸の蔭により、飢しのを凌ぐも少なからず、小実こじつは又、桜戸の着物を洗い縫いなどして、いと懇ねんごろにもものするにぞ。桜戸も又、折節せしげはちとの銀子ぎんこを使もつて彼らが元手もとてに致させけり。

かかりし程ふしげに節柴せつしばは月毎に人をもて、桜戸の安否あんびを問まわせ、又、冬の衣装なども九月の頃に送りしかば、桜戸はなかなか不自由ふじゆうなる事も無く、流人るにんどもに羨うらやまれて百日あまりの月日を送るに、冬も半ばになりし頃、ある日夫婦とおぼしき武士ぶしの旅人りゆうじん、真琴屋まことやの店へひらりと入つて奥の座敷へ通りにければ真介ますけはこれを迎えつつ、

「客人きやくじんは酒をや召いされるか、飯いを出だし候べきか」と問いも果てぬに、その武士ぶしは忙ふとわしく懐ふところより金かね壺つぼ分を取り出して、これを真介ますけに渡して云う様、

「酒も飲いむべく、飯いも喰まうべし。さばれ今此まの所へ招まねき寄せる人あれば、その輩ともがらが揃そろつて後に酒も肴さかなも多少を問まわず、いくらなりとも出まだせかし」と云いつつ金かねを渡すにぞ、真介ますけはこれを受け取つて、

「そは誰人たれをか招まねきたまう」と問まえは彼の武士ぶしは声こゑを潜ひそめて、

「我は本間の身内の剣山四伝次と奈落婆を呼ばんと欲す。和主、今我が為に彼の兩人を伴い来よ。さあさあ」と急がしたつれば真介は佐和田へ走り行き、しかじかと由を告げ、やがて四伝次、奈落婆を誘いたてて来たれども、四伝次も奈落婆も此の旅人を見知らねば、さすがに進みかねたるを旅人夫婦は座を立てて理無く座敷へ引き入れて、上座に押し直らせ、

「御両所、さのみ怪しみたまうな。事の訳はやがてぞ知れん。まず盃を持て来よ」と云うに真介は心得て、始めに吸物、硯蓋※、銚子、盃取り揃え、次第、次第に持て出だすに、只、これ機を織る如く、しばしも暇無かりけり。その時、武士の旅人夫婦は真介を近く招き寄せ、

「我らはちどの用事あれば、手を打ち鳴らして呼ぶまではもはや何も出すに及ばず。酒は手づから火鉢にて温めて参らせん。徳利に入れて持って来て置け」と云うに真介は心得て、かたの如くにしてけるが、深く心に訝って妻の小実に囁く様、

「御身は何と思うやらん。彼の人々こそ心得ね。始め我が剣山と奈落婆と▼を呼んで来るに、互いを知る人ならぬが如し。且つ、あの男女の旅人の声音はまさしく京談なり。去ぬる頃、桜戸様の物語りにて密かに聞きぬ。もしやあの人々は亀菊殿の使いにて、桜戸様の身の上に良からぬ訳のありもやせん。我は店を守るべきに、御身は格子の下へ廻って、その云う由を聞きたまえ」と云うに小実は思案して、

「しか思いたまいしなれば、立ち聞きをするまでも無し。地藏堂へ走って行って、桜戸様を伴い来て隙見をさせれば立ちどころにその疑いは解けはべらん」と云うを真介は押し止めて、

「そは甚だしかるべからず。彼の女中は男勝りにて武芸にさえ長けたまえば、もしや彼の二人が予ねて聞く舳太夫、陸船夫婦ならばたちまち怒りに耐えずして、事を引き起こされては我々も巻き添えせられて身の災いに及ぶべし。我が云う由に従って、よく聞きすましたまえかし」と諭すに小実は心を得て、格子の方に赴きつつ、立ち聞く事半時ばかり。さて立ち帰りて夫に云う様、

「いずれも声が低くければ定かには聞き取れねども奈落婆が只一言「亀菊様」と云いし声のみ、紛う方なく聞こえたり。又、彼の旅人の男女が手紙を渡して二人に見せて、又、二包みの金を出して囁きながら渡しにければ、四伝次殿も奈落婆も喜ぶ事大方ならず、「我々、上手く計らって見せ申さん」と云いしぞかし。この他は云う事の分りはべらざりしが」と告げる折から座敷にて手を打ち鳴らし呼びしかば。真介は「あい」と答えつつ、走って座敷に赴きしが、四伝次の膝の辺に一報の手紙が在りしを忙わしく隠しけり。

※硯蓋(すずりふた): ①硯箱の蓋。②祝いの席などで、口取りの肴をのせる盆状の器。

※紛う(まごう): ①他のものとよく似ていてとりちがえる。②入り乱れる。

その時、旅人夫婦の者は「さあさあ茶を参らせよ」と云うに真介は退いて、用意の煮花※を持っていだせば四人はこれをうち飲んで、四伝次と奈落婆は先へ立って出て行きぬ。

旅人二人は後に残って酒食の値を取らせなどして押し続けてぞいで行きける。

※煮花(にばな): 煎じたての香りの高い茶。でばな。

真介夫婦はその事が心にかかれば、とやあらん、かくやあらんと密めいて噂をしつつ居る程に、影が射してや桜戸が招かずも来にければ、夫婦は奥へ迎え入れ、さて在りし事の趣を斯様斯様と告げるにぞ、桜戸聞きつつ驚いて、

「その武士の旅人夫婦の面体はいかがなりし。年の齡は幾ばくなりし」と問うに真介は小実諸共、
「その顔形は斯様斯様、年の齡はしかじか」と告げれば桜戸は齒を食い縛り、
「そは疑うべくもあらぬ、舳太夫と陸船なり。彼の悪人どもは遙々と、此の地へ密かに立ち越して、
私を害せんと謀るよな。今、此の恨みを返さずば、いずれの時を待つべきぞ」としきりに恨み憤
るを真介、小実は諫め宥めて、
「御腹立ちは道理なれど、「他所の盗人を防がんより、おのれが門の用心せよ」と云う諺もある。
なれば怒って事を破らんより、身の用心して防ぎたまえ」と言葉を尽くして止めけり。

しかれども桜戸は憤りに耐えざれば、真琴屋を走り去り、佐和田の町を見巡るに、古道具を商
う店に仕込み杖の手槍あり。長さは五尺ばかりにして上より見れば棒の如く、鞘を外せば手槍なり。
「此は究竟※の物なり」と思えばやがて買い取って、この他に九寸五分の懐剣をも買い求め、これ
より日毎に舳太夫と陸船を尋ね歩くに、その帰るさには真琴屋へいつも必ず立ち寄って「今日も奴等
に会わず」と云う。真介夫婦は深く憂いて様々になだめつつ、手に汗握るばかりなり。

※究竟(くつきょう): ①仏語。物事の最後に行きつくところ。無上。②極めてすぐれていること。③極めて都合がよい。あつらえむき。

○さる程に桜戸は陸船らを尋ねる事、五七日に及べどもその影をだに見る由無ければ、又、今更に
疑い迷って心ともなく怠りけり。かかりし程に奈落婆はある日桜戸を呼び寄せて、
「そなたは予て節柴殿より頼ませたまう由もあれ、私が折々四伝次主へ良き様に取り成したれば、
今一段と引き上げて山芋倉を守らせよと四伝次殿が仰するなり。そもそもその山芋倉は流人どもが
夏毎に山稼ぎして取りいだす、夏引※の芋を入れ置かれる一構えの倉地にして、ここより二十町余り
にあり。その倉を守る者を女をもてせられる由は女子は手ぶり柔らかにて芋を取り扱うに良ければ
なり。彼処は地藏堂に立ち優って、役得も▼少なからず、よってそなたを遣わさる。よく勤めよ」
と云い渡せば、桜戸は浅からぬ情けの程を言請けして、まず真琴屋へ赴きつつ、しかじかと由を告
げて、
「剣山、奈落らは私を害せんと、謀らずして役替えさせるはいかにぞや。つやつや(つくづく)心得
難し」と云うを真介、小実は喜んで、
「山芋倉は人の望む第一の所なれば怒りを忘れて疑う事無く、早く彼処へ移りたまえ。只、その遠
くなりたまえば、これまでの如く日毎日毎に訪れいたす事も叶わず、さりとて生業の暇々を見合
わせて必ず訪ね奉らん」と云うに桜戸、疑いの解けても解けぬ霜柱、地藏堂へぞ帰りける。

※夏引: 夏に糸をつむぐこと。また、その糸。

かくて程無く四伝次は奈落と共にいで来りて、桜戸を引き連れつつ山芋倉へ赴くに、頃は霜月下
旬にて空かき曇り風寒く、雪ちらちらと降り出せしが、見る見る野山は真白になって三尺あまりぞ
積もりける。

かくて桜戸は山芋倉に至りて見るに、校倉は三棟にして辺に一軒の草の屋あり。囲炉裏の辺に
流人の老女が三輪組みてぞ居たりける。その時、四伝次、奈落婆はその女を呼び立たし、今日より
して桜戸に此の校倉を守らせる事の由を云い渡して、
「汝は早く退き去って、地藏堂を守れかし」と云うに女は一議に及ばず、倉の鍵と帳面と山芋の
目録を取り出して桜戸に引き渡し、又、柱に掛けて置きし、一つの瓢(ひょうたん)を指差して、

「御身もし酒を買わんとならば、これより八九丁東の方のしかじかの所に酒屋あり。瓢は私が置き土産」と云いつつ、やがて蓑笠を着て、四伝次らに従って地藏堂へぞ赴きける。さる程に桜戸はその草の屋に只一人、つくつくとして居る程に、早や黄昏て物寂しく、壁落ち軒端傾いて荒れたる宿はいとどしく、身さえ凍えて耐え難し。

日の暮れ果てぬ程にこそ、ちとの酒を整えて今宵の寒さを凌がんと思えばやがて、その瓢を忙しく取り下ろし、仕込み杖に結び付け、すなわちこれを突き立て突き立て、酒屋を指して行く程に、道五六町ばかりにして道の片方に荒れ果てたる小さき観音堂が在りしかば、立ち寄って伏し拝み、「我が行く末を守らせたまえ」としばし念じて、ようやくにその酒屋へ辿り着けば、酒屋の主人が出迎えて、

「酒はそも、いかばかり求めたまうにや」と問う。その時桜戸はその瓢をうち鳴らし、「これをば見知りていたまうならん。今日よりして此の瓢は私の物になりたれば、又折々に買いに来るべし。今日はまず二合ばかり良く注ぎたまえ」と差し出せば主人はうち見て微笑んで、「さては新たに山芋倉を守りたまう姉御なるよ。しからば負けて参らせん」と云いつつ注いで値を受け取り、渡す瓢を桜戸は又、仕込み杖に引き掛けて彼の草の屋に帰りしに、天道(天の神)烈女を哀れみたまうか、彼の草の屋は大雪に押し潰されて入るべくも非ず。

桜戸はひどく驚き呆れて只、火の元こそ肝要なれと思いにければ、辛くして連子※の隙より潜り入って囲炉裏の埋み火を探り見るに、火は皆雪にうち消され、灰さえ冷たくなりければ、僅かに心を安くしつ、なおも綿子を探り取り、戸の方へ潜りいでしが、さるにても何処にか今宵一夜を明かさんと、しばらく思いかねたるが、先に道の辺の観音堂こそ究竟なれと、心付きつつ、又更に深き雪道踏み分けて、その堂に辿り着けば夜は早や五つの頃なるべし。

※連子(れんじ): 木、竹などを直角に基盤目(ごばんめ)に組んだもの。

さる程に桜戸は堂内に進み入り、開き戸を引き閉てつつ、持てる綿子をうち敷いて微睡まんとする程に、表の方に物の音して、ただならず聞こえしかば「此は何事ぞ」といぶかって格子の間より覗き見るに、山芋倉の方にあたって火炎が天を焦がして燃えいでければ、ここに再び驚いて、

「さては囲炉裏の火が消え残って、この災い(粗相火)を成すことぞ。何はともあれ走り帰って見届けずばあるべからず」と独り言して慌しく立ちいでんとする折から、向かいより三四人、此方を指して来る者あり。その声間近く聞こえしかば桜戸はいでもやらで、しばらく彼をうかがう程に、その四人は観音堂の軒端に等しく集いつつ、内に入らんとしたれども桜戸が内よりして石を寄せ掛け置きしかば、その戸を押せどもたえて開かず、是非無く軒端に立ち休らいで、打ち語らう声を聞くに、その一人は陸船にて、又一人は舳太夫なり。その他の兩人は四伝次と奈落なり。その時、奈落はしたり顔に陸船らを見返って、

「いかに此の謀り事は奇妙ならずや。例え桜戸が武勇ありとも焼き討ちにせられては手を束ねて灰になるべし。あれ見たまえ、よく焼けるではないかいの」と云えば、又、四伝次も

「例え桜戸が炎を潜って焼け死ぬるに至らずとも、山芋倉を焼き失ないしを落ち度とすれば咎は逃れず、いずれの道にも生きてはおかぬ。手立てはいかに」と相誇れば、舳太夫、陸船は笑み傾まけて、

「真に御両所の働きにて、此度こそ桜戸めを思いのままに殺し得たり。立ち帰ってかくと申せば亀

菊様も御満足。彼の軟清もこれよりして桜戸の事を思い絶えて御心に▼従うべし。真に重畳（満足）※重畳」とひたすらに感嘆して、なお火を眺めて佇みたり。

※重畳（ちょうじょう）：①幾重にも重なること。②このうえもなく満足なこと。

桜戸これを聞きながら密かに天地を伏し拝み、
「今、計らずも日頃の恨みをここに返す事、喜ばしや本望や」と勇みに勇んで、仕込み杖の鞘を外して脇挟み、内より扉をさっと開いて、
「大悪人ども、桜戸がここに在るをば知らざるや」と罵りかけて衝ていづれば四人はひどく驚いて、逃げるに暇無かりしかば、舩太夫と四伝次は刀を抜いて防ぎ戦い、陸船と奈落婆は雪礫を投げかけて追っ取り込めて挑めども桜戸は物ともせず、四伝次の肩先を只一槍に突き伏せて、手槍をひらりと取り直し、舩太夫が持つたる刃を叩き落とし、胸板を背へ「ぐさ」と刺し貫けば「あっ」と叫んで死んでけり。

その際に奈落婆は落ちたる刃をかい取って、討たんと進むを桜戸は物々しやと引き剥がし、喉を「ぐさ」と仰け様に雪に縫わせて突き止めた。女に稀なる武勇の働き、さすがに深き白雪も朱に染めたる血潮の瀧つ瀬。

陸船は此の有り様に慄き恐れて腰うち抜かし、雪の細道四つ這いに逃げんとするを桜戸は襟髪掴んで引きずり戻し。予て用意の懐剣を抜き出し差し付け、亀菊に諂って夫婦の仲を裂くのみならず、幾度か害せんと謀りし悪事を責め付け責め付け、

「今こそ返す、恨みの刃。受け取れ、やっ」と罵って、胸の辺りを貫いて抉れば苦しむ七転八倒、そのまま息は絶えにけり。

これよりの後、桜戸の物語りはなお長かり。そは三編に著すべし。今年も変わらず御評判。長い筋をも手短く、書き取る所を御推文字。世界は全て女文字、おはもし（恥ずかし）ながら作者の魂胆、まず今板はこれぎり、惜しき筆止め、めでたくかしく、千秋万歳。目出度し、目出度し。

<翻刻、校訂、翻訳：滝本慶三 禁転載 底本／早稲田大学図書館所蔵資料>